

エデン・クロニクル

# ルナティック・ハイ

秋月あきら

## 影踏み

### Level 1 依頼者の影

依頼人との待ち合わせ場所に、決まった場所は存在しない。料亭からカラオケボックス、幅広く溜流斗は対応する。

今日の依頼人は溜流斗を深夜の公園に呼び出した。

昼の公園はサラリーマンの憩いの場。夜の公園は果たして誰のものか？

月光に輝く白銀の髪。ボタンを全快にしたシャツから覗く白い肌。その胸に刻まれた十字の刺青。

溜流斗の紅く妖艶な唇が微笑を浮かべた。

公園に足を踏み入れた瞬間、細長い影が胸を掠めた。

続けざまに襲ってきた同じモノを、溜流斗はバク転をしながら躲した。

溜流斗が逃げた道を追うように、地面には矢が刺さっていた。

そして、すぐに矢は霞み消えた。矢はエネルギー体なのだ。

矢は溜流斗の眉間を狙って飛んできた。

刺さる寸前、溜流斗は矢を素手で受け止めた。すぐに矢は消えてしまったが、手を開くと肉が焼け爛れていた。

焼けた手を握り、溜流斗は後もなく闇夜を駆けた。

耳元を抜ける矢が風を鳴らす。

嵐のような矢の猛撃が瑠流斗を襲う。

狙撃手の姿は見えない。しかし、矢が飛んでくる先にいるはずだ。

矢が降らなくなった。

耳を澄ます瑠流斗。

風を滑る矢の音。

背中から胸を貫通した矢をはじめに、次々と矢が瑠流斗の身体を貫いた。

身体に風穴を開けられた瑠流斗が前のめりに倒れた。

瑠流斗は動かない。呼吸すらしていないように、微動にしなければならなかった。

足音も気配もしなかった。

しかし、その男は瑠流斗を見下ろしていた。

その男は左手でピースサインを作り、中指と人差し指の間に何かあるように抓まんて引いた。ピースサインは弓、抓んだ何かは弦と矢。男は矢を放った。

瑠流斗の後頭部に矢が刺さる寸前、その矢は瑠流斗の手に止められた。

うつ伏せから仰向けになった瑠流斗。その胸の十字の刺青を見た男が声を漏らす。

「まさか“宵の明星”……」

それは瑠流斗の通り名だった。

瑠流斗の唇が笑う。

「キミは……“アポロンの狙撃手”かな？」

立ち上がった瑠流斗の服には穴が開いていた。だが、肌には穴はない。あんなにも矢で貫かれたにも関わらず、素肌には傷ひとつなかった。

“アポロンの狙撃手”はすでに“弓”を構えていた。

しかし、瑠流斗のほうが早い。

骨を砕く音が闇に木霊した。

瑠流斗に握られた“アポロンの狙撃手”の手首 “弓”が

へし折られていた。

止めを刺そうと瑠流斗が動こうとした瞬間、別の気配がこの場に緊張感を張り巡らせた。

すぐに瑠流斗は相手を押し飛ばし、“アポロンの狙撃手”は逃げていった。

新たに現れた気配は土の中からした。

地中を移動している。それも浅い位置を移動している。にも関わらず、土が動く様子も、盛り上がる様子もない。

敵は瑠流斗のすぐ足元まで迫っていた。

地面から白く繊細な手を伸びた瞬間、瑠流斗は高く飛び上がった。

空中から地面を見た瑠流斗の瞳に映ったものは、地面から飛び出した裸体の美女。

“陸上のマーメイド”だな？”

“そうヨ。マサカ相手が“宵の明星”ダツタとはネー”

中国なまりのアクセントだ。

“宵の明星”、“アポロンの狙撃手”、そして“陸上のマー

メイド”、裏社会では“通り名”が付くほど有名な存在だ。

依頼人の代わりに、瑠流斗の命を狙う者が現れた。簡単に考えて依頼は瑠流斗を誘き出す口実。その狙いは瑠流斗の殺害か？

ただ、瑠流斗には気がかりなことがあった。

「人魚さん、依頼人の素性を知っているかい？」

「依頼人を明かすと思うか？」

「依頼人を明かして欲しいわけじゃない。依頼人が誰なのか、それを知っているかどうか、それが重要なんだ。無駄な殺し合いをしなくて済むかもしれない」

「ワタシと戦う怖くなったか？」

「……怖い？」

世にも恐ろしい笑みを瑠流斗は浮かべた。

まずは小手調べ。

「ダーククロウ」

眩きと共に、漆黒の爪が瑠流斗の手に装着された。

一気に相手の懐に踏み込み、ダーククロウが“陸上のマーメイド”の躰を抉ろうとした。

だが、瞬時に“陸上のマーメイド”は地に潜った。

瑠流斗はすぐに真後ろに向かって回し蹴りを放った。

その蹴りは“陸上のマーメイド”の胴体を確実に捕らえていた。だが、感覚がない。瑠流斗の足は“陸上のマーメイド”を透過していた。いや、足が透過したのではなく、足を透過していた。

そのまま“陸上のマーメイド”は瑠流斗の躰を透過して、すぐに地面に潜って消えてしまった。

ダーククロウの追撃が地面に突き刺さった。手ごたえは地面の感覚だけ。

地中のみならず、人間の躰をも透過する“陸上のマーメイド”。攻撃を与える術はあるのか？

地の底から水撃は放たれた。その水圧は肉を貫くほど、見事に瑠流斗の腹に親指の先ほどの穴を開けた。

瑠流斗の傷はすぐに塞がった。

「厄介な相手だね」

それは相手も同じことだろう。敵として戦う瑠流斗は厄介な相手だ。

地中を漂う気配。地面は身を隠すと同時に盾となる。通常の武器では歯が立たない。

チャンスは地上に顔を出した時。だが、物理攻撃は透過される。ならばどう倒す？

瑠流斗は辺りを見回した。

噴水、ベンチ、電灯、樹木。

瑠流斗は電灯を登るのではなく、引力に反して柱を走った。

電灯の天辺に立った瑠流斗は地上を見回した。さすがの“陸上のマーメイド”も、細い電灯の柱を泳ぐことはできない。

地中から放たれた水撃が瑠流斗を狙う。それを避けることなく瑠流斗は受けた。

腰の後ろから瑠流斗はリボルバーを抜いていた。

放たれる怨霊呪弾。

口径の大きなリボルバーから撃たれた銃弾は通常のものではない。その弾丸は怨霊を孕んでいた。

老婆の嗤う声、若い女の叫び声、幼子の泣く声。

呪弾は水撃の放たれた地面に撃ち込まれた。

「キヤアアアツ！！」

地の底から沸く悲痛な叫び声。

躰を海老反りにしながら、「陸上のマーメイド」が地上に飛び出てきた。まるで丘に上げられた魚だ。

腹から血を流し、躰を痙攣させている。「陸上のマーメイド」に戦意はない。白目を剥いて、口からは泡を吐いている。その表情は、何か恐ろしいモノを見たように、酷く歪んでいた。

「人魚姫の精神は実に繊細だったらしい」

電灯から瑠流斗は軽やかに地面に降りた。それは舞う羽根のように音もなく。

微かな気配。拍手をしながら何者かが近づいてきた。

瑠流斗はすぐにその人影を見た。

「誰だい？」

「実にお見事じゃ。これならば君に仕事を任せても問題ないじやろう」

「ボクを試したのですか、影山源三郎かげやまげんざぶろう氏？」

その名は瑠流斗をここに呼び出した者の名。正確にはダミーの依頼人から、情報を辿って行き着いた本当の依頼人の名である。

「わしが依頼人だとよくわかったな」

「はい、情報収集が趣味なので」

「腕だけではなく頭も使えるようじゃな」

皺くちやの顔で源三郎は怪しげな笑いを浮かべた。

影山源三郎 帝都エデンの恩恵を受けた実業家のひとりだ。

東京が死都と化したとき、経済界は大きな打撃を受けたが、これをチャンスと見た者もいた。東京が死に、代わりにエデンが生まれた。

突如として現れた女帝によって造られた魔導と科学の都

帝都エデン。死都と化した東京の技術と文化が流れ込み、女帝たちのもたらした魔導と融合し、世界を動かすほどの技術革新が起きた。これはビジネスチャンスに他ならない。

当時から資産家であった源三郎は、全ての金を魔導につき込み、成功者となった。

しかし、源三郎はすでに息子に会社を任せ、気楽な隠居の身だと云う。

二人はベンチに座って話をすることにした。

先ほどまでなかった気配が公園中から感じられる。おそらく源三郎のSPだろう。今この時間、公園に入るものなら殺されるに違いない。

溜流斗が尋ねる。

「それでボクにどんな依頼でしょうか？」

「愚息を殺して欲しい」

「月並みな依頼ですね」



あっさりと言い放った。

瑠流斗の仕事は殺しに限る。そう、彼は殺し屋なのだ。

親族や恋人を殺して欲しいという依頼はよくある。恋人

いや、元恋人を殺して欲しいという依頼や、親族間であれば相  
続問題が多い。

瑠流斗は立ち上がった。

「ボクはこれで失礼します。依頼料は成功報酬としていただきま  
す、では」

立ち去ろうとする瑠流斗に源三郎が手を伸ばす。

「君、待ちたまえ！」

「まだ何か？」

神妙な顔つきで瑠流斗は振り向いた。

「わしに聞くことはないのか？」

「いえ、別に……」

「なぜ息子を殺して欲しいのか、その理由を聞かなくて良いの  
か？」

「ボクには関係のないことです。ターゲットがどんな善人  
でも、ボクには関係のないことです。しかし、話したいのなら  
どうぞ、聞きましょう」

瑠流斗は再びベンチに腰掛けた。依頼人の話を聞いてあげる  
のも仕事のうちだ。報酬の支払いが終わるまで、依頼人として  
の関係が続く。

ひとつ咳払いをして源三郎は話しはじめた。

「今のままではわしが築き上げた会社は息子に壊されるだろう。

奴は経営のなんたるかを全くわかっておらん。奴に会社を譲ったのはわしの人生で最大の失態じゃ」

まあまあ月並みな話だ。

「ならば他の者に会社を任せればいいでしょう。あなたは隠居ですが発言力はあると思えます。それになにより父親だ、息子は父の言うことを聞くものです」

「息子が父のいうことを聞くような時代じゃない。発言力があるのはたしかじゃが、わしが息子を退陣させようと画策をはじめると、奴め、わしを暗殺しようと手を打ってきた」

「なるほど、齒に齒を、眼には眼を。そこでボクに息子を殺せとおっしゃったのですね」

これで理由も聞き終わった。再び瑠流斗が腰を上げようとすると、また源三郎が口を開いた。

「瑠流斗君、君は影についてどれくらい知っているかね？」

突然、なぜそんな話を……と瑠流斗は首を傾げた。

「それは科学的な見地からでしょうか、それとも別の見地から？」

「人が動けば影も動く。では、影の動きを止めれば人は動かなくなるのではないかね？」

不思議に思いながらも瑠流斗は話を繋げる。

「ふむ、影縫いという技が有名ですね」

「そのとおり、この原理は昔から考えられているものなのだよ」

「影は決して消えません。大きな闇に隠れて見えなくなること

はあってもね」

「どうだね君、君に影の自由を奪うことはできるかね？」

「さて、わかりません」

できないとは答えなかった。

伸びた重い瞼で隠されていた源三郎の眼が、カツと見開かれて瑠流斗を見つめた。

「わしは君が仕事を任せるに値する人間か試した。戦いを見たわしは君が絶対の自信を持っていることを知っておる。『わからない』と答えるのは謙虚とは言わんよ、傲慢じゃ」

そう言われ、瑠流斗はなぜか口元を緩めた。

「ボクの通り名をご存知で？」

「“宵の明星”だそうじゃな」

「そう、宵の明星　ルシフェル」

「リュシユフェルはその傲慢な態度ゆえに天から墮とされ、輝ける栄光をも失った」

「本当にそうお思いで？」

若者の口調は少し悪戯だった。

「どうということかね？」

「あなたは夕焼け空を見たことがないのですか？」

「質問の意図がわからんな」

「空で輝く一番星は、いつたい何です？」

「金星……ルシファーだ」

「ルシファー、ルシフェル、呼び方はいろいろあります。では、答えはおわかりでしょう？」

「輝ける栄光は失っていないと？」

「さて、どうでしょう」

「君はまったくの食わせ物だな」

瑠流斗は静かに微笑んだ。

「では、あなたのご依頼はお受けいたしましょう」

「そうか、頼んだぞ」

先に立ち上がったのは源三郎だった。その背中を瑠流斗は視線で追った。

杖を突く音と、去って行く足音。

姿を見えなくなっってから、静かな夜に車のドアが閉まる音が聴こえた。そして、すぐにエンジン音が遠ざかって行った。

「良いエンジンの音色だ。さすがは大富豪であらせられる影山氏」と言いたいところだが

闇に潜んでいた殺意が、瑠流斗を目掛けて襲ってきた。

「ぐぎゃあ！」

闇の中に木霊する悲痛な叫び。それは瑠流斗の発した声ではなかった。なぜなら、瑠流斗は涼しい声をしていたからだ。

「手加を減させていただきました」

すぐに咳き込む音が返ってきた。

「げほっ、げほっ……すまん、少し君を試すつもりじゃった」

「知っています。だから、その程度で済ませました」

瑠流斗が話しかけている方向には闇が広がっていた。ベンチのすぐ後ろにある小さな林。その中に人の気配はまったく感じられない。

「それにしても瑠流斗君、今わしは死にかけたぞ」

「ですがあなたがボクの依頼人でなければ、殺しているところ  
です。あなたもボクを本気で殺そうとしたのですから、お互い  
様です」

そう言つて瑠流斗は何も見えない闇の中に微笑みかけた。

源三郎は闇の中でゾツとした。

天使のような微笑であるにも関わらず、表情とは裏腹に魔性  
を孕んでいたのだ。

天使でも、悪魔でもない、墮天使の笑み。

「君の実力はよくわかった。これなら君に依頼を任せても心配  
あるまい」

「ありがとうございます。あなたの息子さんを必ず殺してみせ  
ましょう」

去ろうとする気配を瑠流斗は呼び止めた。

「待つてください。ひとつ忘れていました」

「なんだね？」

「あなたがボクを試したせいで、服がボロボロになりました。

これは依頼料とは別に、のちほど請求させていただきます」

闇の中から咳き込む音が聴こえた。笑いを堪えて咳き込んで  
しまったのだろう。

「……わかった、ちゃんと弁償させてもらおう。ではな」

去つて行く気配は感じなかった。けれど、おそらくもういな  
いだろう。

一人残された瑠流斗は闇の中で神妙な顔付きをした。

「影が動けば本体も動く……ではないのかもしれないな」

それは自然の摂理のはずだった。

暗い公園を瑠流斗は静かに歩きはじめた。

こんなところで時間を潰している暇はない。なぜならば、瑠流斗はまだ夕食の買い物すらしていないからだ。

深夜まで開いているスーパーに行くには、少し遠回りで帰路に着かねばならなかった。

この都市は闇を消し去ろうと、眩いまでの繁栄を極めていた。二四年前の暑い夏の日、世界は変わった。

黙示の戦いとも云える謎の 聖戦 による崩壊。そして、女帝による新たな都市の創造。

誰がこの世界で魔導が繁栄すると想像しただろうか？

帝都エデンは科学と魔導が混在する街。

魔導炉は原子力発電を凌駕し、都市のエネルギーを賄う。

この都市が輝けるのはすべて魔導のおかげだった。

しかし、どんなに輝こうとも、輝けば輝くほどに、闇はその深さを濃くしていく。

都市の輝きは及ばぬ地域、それがスラム街である。

スラム街の一区間は ホーム と呼ばれ、アンダーグラウンドな世界を築き上げている。

人々の放つ猥雑な価値観が混沌と渦巻き、武器の密輸が平然と行われ、昼間から売春婦たち闊歩し、スラムの地下では新興宗教が密会し、可笑しな実験が四六時中行われているのだ。

帝都エデンの繁栄の陰で、スラムの闇は濃さを増す。

都市の電力パイプからエネルギーを失敬して、夜でもスラムは妖しい輝きを放っている。

路地に立ち並ぶ仮設テントから微かな光が漏れ、左右に建つビルは廃ビル寸前だ。基本的にビルに住む人々のほうが、ここ

では上層階級と言えるだろう。

買物帰りの瑠流斗は紙袋を抱えながら、スプレーアートに埋め尽くされたポロアパートに入ってしまった。

エレベーターはいつから故障しているのかわからない。瑠流斗はエレベーターを素通りして、ゆっくりと階段を上がった。

三階のフロアに出て、短い廊下を進む。

廊下の左右にある玄関のナンバーが増えていく。

歩き続ける瑠流斗の耳に、ヒステリックな金切り声が届いた。「殺してやる殺してやる！」

若い女の声だ。

次の瞬間、ドアの向こうから銃声が聞こえた。

あの部屋に住んでいたのは若い男だったと思う。女の出入りが激しく、瑠流斗が覚えていた限りで十人以上の女が出入りしていた。

銃声の聞こえた部屋のドアが開かれ、苦痛に顔をゆがませながら、腹から滴る血を押さえる男が這い出てきた。

「た、助けてくれ」

涙目を浮かべる男の視線の先に立っていたのは瑠流斗だった。

しかし、紅い尾を引いて床に這い蹲る男を見る瑠流斗の眼差しは、夏の夜風のように涼しげだった。

「すまないね、ボクの職業は人の命を救うことじゃないんだ」  
それだけを言い残して、瑠流斗は男の倒れるすぐ横で、自分の部屋のドアを開けて入って行った。

そして、瑠流斗の背後でまた銃声が響き渡った。



一発、二発、三発……。

銃声は恨みの数だけ聞こえた。

「おかえりなさい瑠流斗様！」

部屋に入ったとたん、弾んだ声が響き渡り、小柄な少女が笑顔で瑠流斗を出迎えた。

少女は質素なドレスの裾を揺らしながら、眉を軽く上げた瑠流斗に飛びついた。

「隣の部屋で銃声が聞こえたけど、なにがあっただんでしょうね？」

「男がついに撃たれたよ」

淡々と語る瑠流斗の顔を突き通った大きな蒼い瞳が覗き込む。「瑠流斗様は隣人が殺されても動揺ひとつしないんですね」

「このアパートは壁が薄いからね。これで騒音公害がひとつ減ったよ」

「平気な顔をしていつもそんなことを言う。瑠流斗様はいつも仮面を被っているの」

「それに比べて君は表情も感情も豊かだね」

「ありがと瑠流斗様！」

「機械人形なのにな」

そう、瑠流斗の目の前にいるのは人間ではなく、機械人形だったのだ。

「瑠流斗様、あれちゃんと買って来てくれましたか？」

瑠流斗は紙袋の中から、二〇センチほどの円柱型の物体を取り出して、人形娘アリスに手渡した。

「機械人形のためのエネルギー炉。安物が品切れでね、最高級の物を買って来てしまったよ」

「あとで取り付けてくださいね」

「あとでね。ボクはこれから夕飯の支度をしなきゃいけないから、家事がなにひとつできない君の変わりに」

「ひっど〜い」

機械人形の少女は人間のよう顔に顔を紅くして頬を膨らませた。「人間らしい表情だね。そういう表情が組み込まれているということは、接待業か、メイドアンドロイドだと思うのだけれど、それにしても家事もできないなんて、やはり廃棄処分のためにこのスラムに捨てられたのだろうね」

「それを拾ってくれたのは瑠流斗様です」

「自分でもなぜ拾ったのか理解できないよ」

それは雨の降る昼下がりにあった。壁に持たれかかり座っていた小柄な少女。薄汚れたドレスが雨を十分に吸い込み、まるで捨てられた仔猫のようだった。

瞬き一つしない蒼い瞳は、虚空を映していた。それが人間の眼でないことは、すぐにわかった。

そして、気づくと瑠流斗は自分の家に、泥だらけのアリスを運び入れていたのだ。

なぜ拾ってしまったのか、本人の瑠流斗ですら理由がわからない。

そう言えば、前にも捨てられた猫を拾ったことがあったような気がする。

瑠流斗は過去を回想しながら、ぼんやりと遅い夕食を済ませた。すでに時計は深夜三時過ぎを示している。

皿洗いをする瑠流斗の横で、椅子にちょこんと座り、床に届かない脚をバタつかせるアリス。その姿はまるで本物の少女のようだ。

「瑠流斗様、早くバッテリーの交換してくださいよ」

「君が皿洗いを手伝えば、早く替えてあげられるよ」

「だって瑠流斗様が洗い物をするなって言っただもん」

「そうだったかな」

そうだったような気がする。料理を任せれば味付けに消火器の粉を振りまけ、皿洗いを任せれば豪快な音楽を奏でてくれた。それ以来、瑠流斗はアリスに家事をやらせていない。

皿洗いを終えた瑠流斗はアリスを寝室に招き入れた。

「上半身裸になって、ベッドに横たわってくれるかな？」

と言われた人形娘アリスは顔をほのかに赤らめた。

「恥ずかしいです」

「思考停止状態の君に、ボクがなにか変な真似をすることを思っているのかい？」

「瑠流斗様はわたくしにとってご主人様ですけど、瑠流斗様は仮にも男性だし……」

「たしかに機械人形の所有者の中には、性欲を満たすために人形を使う者いるだろうね。でもね、ボクは君のことをただの人形としか見ていないよ。君は女性じゃない、人形さ」

アリスは少し哀しそうな顔をしてから、瑠流斗に背中を向け

てから上着を脱ぎはじめた。

陶器のような白い背中を露わにした少女の模造品は、小さな胸元を両手で隠しながらベッドにうつ伏せになった。

瑠流斗の織手が背中に伸びた。

微かに震え、陶器のような肌に赤味が差す。

指でやさしく背中をなぞり、瑠流斗は囁くように呟いた。

「ここだね」

「そこです」

人の肌と寸分変わらぬその下に、微かに硬いボタンのようなモノを感じた。

「しばらくの間、おやすみ」

そこでアリスの思考回路は停止した。

目に見えないほど細い切れ目が開かれ、機械人形の背中は見た目とはアンバランスな機械の部分をあらわにした。

中に入っていた二〇センチほどの筒を取り出した瑠流斗は、それに刻まれた年号とエネルギー残量メーターに目をやった。

「ふむ、たった一ヶ月でエネルギー残量がゼロに近い。ボクが買ってきたバッテリーと同じ商品なのにも関わらず」

瑠流斗の買ってきたバッテリーは最高級品であった。通常の動きをする機械人形であれば、一〇年は稼働可能だろう。それと同じバッテリーが組み込まれているのも関わらず、一ヶ月たらずでバッテリーは寿命を迎えようとしていた。

「一〇年分の働きを一ヶ月でするのか、それともエネルギー漏れをしているかだね」

エネルギーが漏れていた様子はない。

それほどのエネルギーを使用する片鱗すらアリスには見られない。

一般に出回っている機械人形に比べて、超高性能の高級品、魔導式機械人形では最高峰のレベルだろう。何億するかかわらないような代物だ。軍用のジェット機より高いだろう。

だからといって、このエネルギーの消費量は異常だ。

なにかアリスには秘密があるに違いなかった。

アリスを拾ったあの日、変わったことはあつただろうか？

なにもなかった。

それどころか、拾った後にもなにもない。

こんな代物が“行方不明”になれば、なんらかのアクションを起こす者がいるはずだ。

溜流斗からアクションを起こす気はなかった。いつの日か正当な持ち主が尋ねてくれば、すぐに返す気である。だが、自ら持ち主探しをする義理はなかった。

バッテリーを取り替え、背中の蓋が閉められた。

数秒の間を置いて、アリスは深い眠りから目を覚ました。

アリスは胸元を隠しながら上体を起こし、辺りを見回したが、すでに溜流斗の姿はない。

いったい溜流斗はどこに消えてしまったのだろうか？

冬の朝日は遅く昇る。

天を突く摩天楼。ビル街の窓が日差しを反射する。ヒラリ

マンの出勤時間はすでに過ぎてている。都心に向かう満員電車も、今は解消される頃合いだ。

邸宅から会社に向かうロールスロイス。

車は閑静な住宅街を抜け、ホウジュ区のオフィス街までやって来た。

超高層ビルの高みから、瑠流斗は目を細め地上を見下ろしていた。その瞳に映るのはロールスロイス。

強風の吹き荒れる屋上に立った瑠流斗は、空を飛ばたく鳥のように両手を大きく広げた。

そして、本当に飛ばたいのだ。

地上に落下する瑠流斗はどんどん加速し、地表にぶつかればどうなるかは目に見えている。

だが、結果は予想を反した。

雷鳴でも落ちたかの地響きが鳴り、超合金でできた特別製のロールスロイスは、そのフロント部分を見るも無残に大破させられていた。そこに立っていたのは、瑠流斗。

「ごきげんよう」

なんと、この状況には似つかわしくない挨拶であろうか。瑠流斗は平然とした顔で優雅に片腕を広げ会釈をした。

挨拶をした相手はロールスロイスの後部座席に乗っている男だ。

すでに運転手役を務めていたボディーガードは、瑠流斗飛来により衝撃でショック死して、助手席に乗っていたボディーガードは、顔中に血化粧をして意識朦朧としている。残るボデー

「ガード二人は溜流斗のターゲットを挟むように左右に座っている。

かなり嚴重なガードだが、これは普段からのものなのか、それとも誰かの手の者を恐れているのか？

しかし、どんな嚴重なガードをしようと、溜流斗の前には無意味だ。

後部座席から拳銃が火を噴いた。

一発、二発、三発と、全ての銃弾は確かに溜流斗の身体を貫いた。

「それで終わりかな？」

平然とした顔で溜流斗は聞いた。

また銃口が火を噴くが、溜流斗は避けることもなく、身体を貫く銃弾を感じる。

引き金を引くが、カチカチと虚しい音が鳴り響くだけ。

弾倉をすぐに取り替えることもできただろう。

普段ならば自分が撃った弾の数を把握し、弾切れを起こすこともなかっただろう。

しかし、目の前の若者は人にして人にあらず。その内面から溢れ出す鬼気に押され、ボディーガードの思考は使い物にならない状態だった。

ボディーガードの雇い主は全身から恐怖を噴出させ、服はすでにびしょびしょに濡れて冷たくなっていた。

全身を凍えが襲い、ついに男はボディーガードを捨てて車外に逃げ出した。

車外に出た男は勢い余って地面に躓いた。

アスファルトに腹ばいになった男に手を差し伸べる者はいない。渋滞になりかけていた車も、銃声が響きはじめてすぐに逃げるように去って行った。

男の荒い息使いと、ブーツの鳴り響く音。

充血した眼で男はブーツから上を見上げた。

「逃げても無駄だよ。地獄の果てまで追いかけるから」

陽光の下でありながら、まるで夜を背負っているような男。

微笑みはまるで天使のようでありながら、その翳に潜む狂気の沙汰。

「影山雄蔵（うしろやま いくぞう）氏だね。ご依頼により、あなたの命を貰い受けに来ました」

その口調はあくまで淡々としていた。そこに感情などない。

雄蔵は戦慄した。

このままでは確実に自分は殺されてしまう。

わなわなと震える口を抑え、雄蔵は上ずった声を発した。

「わ、私は違うんだ。私は影山雄蔵ではない！」

実に陳腐な言い訳だった。もっとマシな言い訳は思いつかなかったのだろうか？

「ふむ、あなたは自分を影山雄蔵氏ではないと言うのかい？」

そんなはずはない。影山雄蔵の顔はマスメディアによって知れ渡っている。

魔導産業で莫大な富を築き上げた影山源三郎氏が隠居し、そのあとを継いだ雄蔵氏の顔は業界の者ならば誰でも知っている。



専門誌で顔写真つきのコラムもやっけていて、その写真の顔と今ここにいる顔は瓜二つ。見間違うはずがない。

しかし、別人であるという可能性がないわけではない。

「影武者なのかい？」

整形技術を頼れば、同じ顔や体型などいくらでも量産できる。もしくはクローン技術で作られた身体に別人の脳を移植することも不可能ではない。それには莫大な資金と非法な技術に手を染めるといふデメリットがあるが、影山氏ほどの大富豪となればやるだろう。

「私は雇われただけなんだ。本物の代わりに表舞台に立って会社を運営し、メディアへの対応もした」

「ふむ、つまり本物の影山氏は常に影に潜んでいるわけだね。」

「それであなたは本物に会ったことはあるのかい？」

「会ったと言えるかはわからない。声だけしか聞いたことがないのだよ」

「では、顔もまったく知らないわけかな？」

「そうだ、顔もまったく知らない」

「今のあなたの顔は生まれたときのまま？」

「そうだ、これは私の自前だよ。本物の影山雄蔵は表舞台に立つことは決してない。だから、本物の顔に似せる必要などないのだよ。社会では私が影山雄蔵なのだから」

溜流斗の問いかけに答えながら、自称雄蔵のニセモノは心底から身体を震わせ、心臓は激しく脈打ち心臓発作も起こしかねない状態だった。

「なるほど」

と頷いて、瑠流斗は怯える襟首を掴み、無理やり男を立たせた。だが、男は脚に力が入らず、まともに立てる状態でなく、脚はだらしなく折曲がったままだった。男を支えているのは瑠流斗の片腕の力だけだ。

「ふむ、君には影があるようだ」

摩天楼に反射する光でできた男の影を見ながら、瑠流斗は少し動きを止めた。その耳が微かに動く。

遠くからサイレンの音が聴こえる。

「帝都警察のご登場か……」

男は襟首を突き放され、その勢いで地面に尻餅をついた。固唾を呑み込んですぐに辺りを見回すが、瑠流斗の姿はすでにどこにもなかった。

「ただいま」

その言葉を言うようになったのはアリスが来てからだ。

「お帰り瑠流斗様！」

笑顔のアリスが当然のように出迎えた。

昼食には少し早い時間に瑠流斗は帰って来た。

すぐに昼食の準備をはじめると瑠流斗。やはりアリスはなににも手伝わない。

できあがったパスタをテーブルに置き、黙々と食べはじめると瑠流斗。それをアリスがじっと見ている。

「美味しいですか？」

「美味しいよ」

これで会話が止まってしまった。

アリスは少し顔を膨らませて瑠流斗を見ている。そんなことも気にせず瑠流斗はパスタを食べ終え、すぐに皿洗いをはじめた。

いつもこの調子だった。

機械人形のアリスは歯痒さを感じていた。

「わたくしのこと無視してませんか？」

「なにがだい？」

「もつと話に乗ってきてもいいと思うんですけど……」

「話をしたいなら、君が一方的に話せばいい。興味のある話題

「なら耳を傾け、相槌も打つよ」

「なにか瑠流斗の興味を惹こうとアリスはしゃべろうとするが、なにひとつ話題が浮かばなかった。それもそのはず、アリスは瑠流斗に拾われる前の記憶が全く無く、ここに来てからも部屋を一步も外に出たことがないのだ。」

「アリスは外に出るのが怖かった。」

「自分がここに来てから、瑠流斗は寝室を自分に明け渡してソファで寝ている。昨日は大金を払わねば買えない機械人形用のバッテリーを買って来てくれた。そして、なにより自分を捨ててくれた。瑠流斗にはよくしてもらっている。けれど、アリスは外に出るのが怖い。」

「一度、この部屋を出て行ってしまったら、赤の他人として扱われそうな気がしたのだ。」

「わたくし瑠流斗様のためににかしたいんです」

「君はなにもしなくてもいいよ。なにもできないのだから」

「機械人形とはいえ、高度な知性を持つ以上、傷つくこともある。アリスの胸に瑠流斗の言葉はいつも突き刺さる。この人形娘は他の機械人形よりも、感情が豊かにプログラムされているようだった。」

「わたくしなにかしたいんです。でないとここに存在している理由がなくなっちゃいます」

「人形なのに、己の存在理由を問うのかい。おもしろいことを考えるね」

「淡々としゃべり、淡々と皿洗いを終えた。」

「己の存在理由が欲しいなら、ここを出て外の世界で探せばいい」

「イヤです、絶対にイヤです。瑠流斗様の傍にいたいんです」

「それは拾い主のボクへの忠義かい？」

「わかりません」

「ふむ、機械人形の君はある意味人間よりも高度な知性体と言える。だから大抵の機械人形はワザといういろんな感情を欠如させられているんだ。人間とまったく同じ感情を抱けば、人間のように自らの意思で犯罪を犯す機械人形も出てくるだろう。いや、過去の例をあげれば機械人形が人間に対して反逆した例はいくらでもあるよ」

皿洗いは終わったというのに、瑠流斗はまだ入念に手を洗い流していた。

「自分の存在理由を問う君は変わっているよ。君を作った人はなにを考えて、君という存在を作ったのだろうね」

「機械人形がこんな感情を抱いちゃいけないの？」

「さあ、ボクには関係ないことさ。君の勝手だ」

「瑠流斗様は自分の存在理由を考えたことはないんですか？」

答えまで少し間があった。

「あるよ、いつも考えている。君は誰かに生かされてると考えたことはあるかい？」

「今わたくしは瑠流斗様に拾われて面倒を看てもらってます。

瑠流斗様に捨てられたら、どうしていいかわかりません」

「ボクはね、人をこの手で殺し、人の命がこの世から消える瞬間

間、もつとも自分の存在理由を感じるんだ」

「よくわかりません」

「わからなくていいさ」

洗い終わった食器を拭いて戸棚にしまった瑠流斗は、静かにこの場から歩き去るうとした。

「あの、瑠流斗様」

「出かけてくる。またいつ戻るかはわからない」

身支度を済ませ玄関に立つた瑠流斗は、背後にいるアリスに声をかけた。

「昨日取り替えた君のバッテリー。ボクが帰るまでに　ホー  
ム　の廃棄処分場に捨ててきてくれるかい？」

「わかりました！」

アリスは声を弾ませて答えた。しかし、その声を出す前に瑠流斗の姿は消えていた。

まるでそれは、はじめてのお遣いを頼まれたときの心境。

嬉しさの反面で、アリスは戸惑いと不安も覚えていた。

外の世界。

この部屋の外にはどんな世界が広がっているのだろうか？

大よその見当は付く。まるで見たことのない風景というわけでもない。

インプットされた景色、テレビを通して見る景色、窓の外に見える景色。

この部屋を出て、果たして戻って来られるだろうか？

ドアの前に辿り尽きたとき、そのドアは再び開かれるのだろうか？

しかし、アリスは瑠流斗の期待に応えなかった。

バッテリーを脇に抱え、アリスはついに外の世界への一步を踏み出した。

部屋のカギを閉め、振り返って廊下を見る。とても廊下が長く感じた。

立ち入り禁止のテープが張られた部屋の横を通り、アリスは階段で下りた。

アパートのビルを出ると、少し風が強いように感じた。

廃棄処分場の場所はどこだろう？

アリスは瑠流斗にある隠し事をしていた。不良箇所があるのだ。

帝都のマップ機能とGPS機能が働いていない。

ここがホームであることは、瑠流斗の話で聞いていたが、それ以上のことはなにもわからなかった。

アリスは路地でボール遊びをする子供たちに尋ねることにした。

「遊んでいるところ悪いんだけど、廃棄処分場の場所を教えてくださいませんか？」

鋭い眼つきの少年はアリスの顔を見て、すぐに遊びに戻ってしまった。

メイド服を着たアリスと、粗末な服を着ているホームの子供たち。貧富の差は明らかだった。

アリスは尋ねることを諦めて歩き出した。

すれ違う男が嫌らしい眼つきでアリスを見ている。なるべくアリスは顔を合わせないように歩いた。

後ろから誰かがつけてくる気配がした。

怖くてアリスは振り向けなかった。

歩く速さを上げたが、追跡してくる足音も早くなった。

何度も何度の角を曲がり、ついにアリスはアパートの前まで戻ってしまった。

まだアリスの脇には空のバッテリーがある。

しかし、これがアリスの限界だった。

バッテリーを捨てることもできず、アリスはアパートの中に逃げ込んだ。

わき目も振らずアリスは瑠流斗の部屋に戻った。

カギを開けようとドアノブに手を掛けると、なぜかドアが開いた。

不思議さよりも恐怖感がアリスを襲う。

しかし、中を確かめないわけにはいかなかった。

それでも主人の留守を任された身である。アリスは部屋の中に踏み込んだ。

部屋の奥で物音がした。けれど、アリスがドアを開けた瞬間、静かに静まり返ってしまった。

何者かが部屋の中にいることは明らかだ。

奥の部屋に行くと、下手な泥棒が入ったように物が散乱していた。確実に誰かが荒らした痕跡がある。



閉めてあったハズの窓が開いている。

アリスが窓の外に顔を出した瞬間、何者かの殺気が部屋に満ちた。

瞬時にアリスは飛び掛かってくるスーツの男を避けた。

そして、自分でも意識しないうちに男に華麗な蹴りを喰らわせていた。まるで格闘技でも習っているような蹴りだ。

蹴られた男は壁にぶつかりぐったりと倒れ、アリスがその男に静かに近づこうとした瞬間、火花の散るような音が聴こえた。アリスの頭に殴られた衝撃と、電気的な衝撃が躰を駆け巡った。

そのままアリスの電腦は停止して床に倒れた。

その傍らに立っている男の手には、電磁ロッドが持たれていた。男は二人組みだったのだ。

しかし、なぜ男たちが瑠流斗の部屋に？

夕方になりアパートに帰ってきた瑠流斗は、その光景を目の当たりにした。

荒らされた部屋と、消えたアリス。

無表情のまま淡々と部屋を見渡し、アリス以外になにかなくなった物はないかと、簡単な片づけをしながら歩いた。

「これだけだな」

アリス以外になくなっていた物は、パソコンのハードディスクだった。

ハードディスクと言えば情報の宝庫である。個人情報から、

仕事に関する情報、ありとあらゆる情報が入っていたに違いない。

しかし、瑠流斗は平然としていた。

デスクの脇にある本棚から分厚い百科事典を取り出し、瑠流斗はその表紙を開けた。すると、中にはなんと外付けのハードディスクが入っていた。盗まれた物はダミーだったのだ。あちらには基本的なシステムしか入っていない。

部屋の現状を見終わった瑠流斗は、何事もなかったようにコーヒーを淹れはじめた。しかも、豆からだ。

出来上がったコーヒーの香を確かめ、瑠流斗は静かなひと時を味わった。

アリスが攫われ、部屋が荒らされたというのに、焦るような気配はまったくくない。異常なまでに落ち着き払っている。

部屋はとても静かだった。

明るく元気なアリスもいない。

隣人の男も死んだ。

瑠流斗は目を閉じて思考を巡らす。

部屋を荒らし、アリスを攫ったのは何者か？

これが一番の問いだろう。

瑠流斗が狙われる理由は山のようにあり、狙う者の数も知らない。選択肢と可能性はいくらでもあった。

現在、瑠流斗が抱えている依頼は一つだけである。

影山雄蔵の殺害。

推測だけではなにも解決しない。

次のアクションが起こることを瑠流斗は待つほかない。  
冬の夜は長い。

瑠流斗は何もせず、ただじつと椅子に座って目を閉じていた。  
どれくらいの間が過ぎ去ったのか、電話のベルが鳴った。

慌てずに瑠流斗は受話器を取った。

「もしもし」

『オートマタを預かっている』

機械人形、自動人形、魔導人形、呼び名はいくつもある。ア  
リスを攫った奴らからの電話だった。

「取引条件は？」

『今抱えている依頼から手を引け』

「今といわれても、“どの”依頼から手を引けばいいんだ  
い？」

『とにかく全ての事件から手を引け』

鎌には掛からなかったが、どの道、遂行中の依頼は一つしか  
ない。

「それでオートマタはどこに取りに行けばいい？」

『お前が依頼から手を引いたという証しを立てるのが先だ』

「難しい注文をつける……」

職業柄、契約書などの書類は残さない。契約は口約束だ。

「わかった。今抱えている依頼の契約書を全て持って行こう。  
それを渡すから、破棄するなり好きにすればいい」

『マドウ区の246号線沿いに改装中の大型スーパーがある。』

店名は××だ。そこに二二時に来い』

「二二時とは早めの時間だね。ところでハードディスクも返して」

通話が切れる音がした。

「……不躰な人だ」

溜流斗の棲んでいるアパートはホウジュ区にある。指定場所のマドウ区はホウジュ区と隣接した都市だ。

まだ指定の時間まで余裕がある。

キッチンに立った溜流斗は包丁を握り夕食の準備をはじめた。切った玉ねぎをなべ底で炒める。他に牛肉やジャガイモ、ニンジンなど材料が見受けられる。どうやら今日はカレーらしい。カレーを煮込みはじめると、溜流斗は荒らされた部屋を几帳面なまでに片付けはじめた。

黙々と片付けられた部屋は前と寸分違わない。まるで時間を巻き戻したような片付けようだ。

掛け時計は一九時を回っていた。

「さて……」

カレーはまだ煮込んだままだ。

溜流斗は鍋に火をかけたまま部屋を出た。

近くに借りている倉庫からオートバイを出し、溜流斗はマドウ区に向かって走り出した。

溜流斗が跨っているオートバイは魔導式のエンジンを積み、小型軽量ながら八〇〇ccの排気量を誇るデュアルパーパスだ。デュアルパーパスとは、舗装路オンロードでも未舗装路オフロードでも走ることができるオートバイのことである。

オートバイの紅いフォルムに合わせて、瑠流斗が被っているフルフェイスヘルメットも紅だ。

身に受ける風は少し湿気を含んでいた。夜空を見上げると星一つない曇天だった。今にも雨が降って来そうな天気だ。

指定された場所は車の通りが多い道路だった。国道を曲がってすぐの場所にあり、おそらく深夜帯になっても車のライトが途絶えることはないだろう。

オートバイを駐車場に停め入り口を探した。ひと目に付かない職員用のドアの鍵が開いていた。

建物の中に入ると、商品棚も全て撤去されており、壁に貼られた透明のビニールシートやペンキの缶が目に入った。

道路沿いはガラス張りの壁で、夜明かりが多少は入ってくるが、店の奥となると暗闇に包まれている。

瑠流斗は構わず暗闇の中を進んだ。

「そこで生まれ！」

男の声が闇に響いた。

すぐに、

「瑠流斗様！」

アリスの声も聴こえた。

最悪のケースとして人質がいなかったのだの畏、という可能性もあったが、少なくとも人質は確認できた。次は取引をする意思が相手にあるかだ。

瑠流斗はスーツケースの中から数枚の書類を出した。

「現在、依頼を受けている契約書を全て持ってきたよ。アリス

君を返してもらおう。あとハードディスクも」

ハードディスクは重要ではない。あたかも重要であると思わせているだけだ。

そして、契約書などはじめから一枚もないので、全てとはゼロ枚である。瑠流斗は適当な書類を印刷して持って来たのだ。

「スーツケースごと書類をこっちに投げる！」

要求してきた男に瑠流斗は平然と答える。

「無理だね。暗闇でなにも見えない。どこに投げていいかわからないよ」

瑠流斗の眼前に広がっているのは闇。声はその中からしていた。

「声のする方向に投げる！」

「ボクは“君たち”を信用していない。先に投げてちゃんとアリス君を返してもらえる保障はない」

先ほどから会話をしているのは男ひとりである。“君たち”という言葉は、男が所属する組織を指してのことか、それとも

……。

「いいから早く投げる！」

「仕方がない。投げるからちゃんと受け取りたまえ」

まるでハンマーを投げるように、スーツケースは力いっぱい投げられた。

豪速で飛んだスーツケースはアリスを捕まえていた男。それも暗視ゴーグルをつけた顔面にヒットした。

骨が折れる音が響くよりも早く、瑠流斗はアリスに向かって

走りながら、もうひとりいた男に向かって呪弾を放っていた。

暗闇の中に怨霊の声が木霊した。

「グアアアツ！」

胸から血噴いた男が声にならない叫びを発した。

瑠流斗はすでにアリスを抱きかかえていた。

「来てくださったんですね」

アリスはドキドキだったが、返ってきた言葉は皮肉たっぷりだった。

「廃棄処分場へのお遣いが、とんだ遠出になったものだね」

「ひどーい、瑠流斗様なんですかその言い方。わたくしが捕まったのが悪いみたいない言い方」

「そのとおりだよ、君が捕まったことでボクは無駄な労力を使った」

「……もういいです、わたくし独りで帰ります！」

「一人じゃ帰れないくせに」

瑠流斗の言い方にアリスは居た堪れなかった。

なにも言えず、哀しい胸を押さえて立ち尽くすことしかできなかつた。

瑠流斗はアリスのことなどほっといて、殺した男たちの物色をはじめていた。

男たちの身元を辿れるような物はなかった。

そして、アレもなかった。

「……ハードディスクがない。これじゃあ取引が破綻するのも当たり前だ」

先に仕掛けたのはスーツケースを投げた瑠流斗だ。  
「さあ、帰るよアリス君」  
歩き出す瑠流斗のシャツの背中をアリスは掴んだ。



襲い朝食の準備をはじめろ瑠流斗。

今朝は昨日の残りのカレーをパンに挿み、油で揚げたお手製カレーパンだ。それに玉子焼きとトマトジュースを加えて、朝食のセットメニューができあがった。

昨日の夜からアリスはご機嫌斜めだった。そんなことなど気にする瑠流斗でもない。だから、そんなことになど触れず、他の話をはじめた。

「近いうちにここを引越すかもしれない」

「……どうしてですか？」

「君が捕まったから」

「……………」

「捕まった君を責めているんじゃないよ。君が捕まったということは、敵にここがバレているということだからね。また来られたら困る」

朝食を食べ終え皿洗いをはじめた瑠流斗は、ため息を吐くように独り言を呟く。

「せっかく隣人が死んだのに、また引越さなければならぬい」

瑠流斗の背後で椅子を蹴つ飛ばす音が聴こえた。

振り向きながら神妙な顔をする瑠流斗。

「君ってそんなことする子だったのかい？」

「……わかりません。なぜか無性に蹴りたくまりました」

アリスに蹴飛ばされた椅子は、見事に壁に当たって大破していた。椅子が飛んだ方向に、何もなかったのがせめてもの救いである。

皿洗いを終えた瑠流斗は壊れた椅子を片付け、さっそく出かけることにした。けれど、今日はいつもの出掛けとは違った。

「行くよ、アリス」

「えっ、わたくしもですか？」

「ここに残してまた攫われたら笑い事じゃない」

「瑠流斗様のお仕事に同伴して、大丈夫でしょうか？」

「問題ないよ」

心配の反面、なぜかアリスは気持ちが高揚した。まるでデー卜のような感覚。

だが、アリスの期待は見事に裏切られた。

貸し倉庫に連れて来られたアリスは『ここで待ってて』と言われたのだ。

蛍光灯の明かりはある。空調もあり、エアコンもある。ただ、窓もなくとても静かな場所だった。こんな場所、まるで牢獄だ。

「嫌です」

アリスは言った。

しかし、瑠流斗は首を横に振った。

「駄目だよ。ここが君にとって一番安全なんだ」

「嫌です、絶対に嫌！」

「子供じゃないんだから、だだをこねるのはやめたほうがいい

「よ」

「子供じゃありません。でも嫌です！」

「なら電源を落とすよ、それでいいだろう？」

「それも嫌！」

「……わがままでなあ」

瑠流斗は難しい顔をしてしまった。

ここが牢獄よりもマシな点は、物が多く置いてあることくらいだろう。だからと言って、それがアリスの気を引くものではない。

数台の車とオートバイ、ハンドウエポンの類……ここは主にそう言った物の倉庫だった。

瑠流斗はアリスとの話を諦め、デュアルパーパスバイクのエンジンをつけていた。

「行っちゃうんですか？」

機械人形なのに愁いを含んだ表情でアリスは瑠流斗を見ていた。

「仕事だからね」

「本当にわたくしをここに置いて行く気ですか？」

「そんなになにが嫌なんだい？」

「独りでいるのが嫌なんです」

「いつもアパートで独りじゃないか」

「違います。テレビだってあるし、外から聞こえる声、窓から景色だって見れます」

「車のカーナビはテレビも見れるから、エンジン掛けよう

か？」

「……瑠流斗様、大ッ嫌いです」

ぷいっとアリスはそっぽを向いてしまった。

その隙に瑠流斗はオートバイを走らせ倉庫を出た。

リモコンで閉まるシャッターの向こうで、アリスは今にも泣き出しそうな顔をしていた。

瑠流斗はシャッターが閉まるのをいったん止め、腕にしていたシルバークセサリーを外し、アリスに向かって投げた。

見事にアリスはキャッチに失敗したが、瑠流斗は何も気にせずこう言いながら再びシャッターを閉めはじめた。

「ボクの代わりだよ。きつと君を護ってくれる」

「……瑠流斗様」

シャッターは完全に閉められた。

オートバイはエンジンを吹かしながら、雨の街を駆け出した。

瑠流斗が向かったのは影山物産株式会社の本社ビルだった。

影山源三郎氏が隠居して、近々社名が変更になるとの噂だ。

目深に帽子を被り、作業服の胸にはIDカード、瑠流斗は清掃員に扮装して社内に忍び込んでいた。

消耗品をカートで運びながら、瑠流斗は何食わぬ顔で廊下を進んだ。

途中でカートを階段のフロアに置き捨て、階段を上ってさらに先を進んだ。

会長がいるフロアには、直通のエレベーターを使うか、もし

くは専用階段から行くしかない。

専用階段に入る前には嚴重に鍵の掛かった扉があった。

瑠流斗はポケットからカードキーを取り出し、プッシュ式のボタンを押して暗証番号を入力した。全て手はずどおりだった。階段を慌てることなく登り、フロアに出てすぐに瑠流斗は通常の銃弾を放った。

二発連続で放たれた弾丸は見張りの男二人の脳を貫いた。

すぐに瑠流斗は天井の防犯カメラを撃ち抜いた。

ここからは全速力で駆ける抜ける。

風が吹くように廊下を駆け抜け、会長室の前に立っていた二人の男を銃弾で仕留め、そのままドアを蹴破った。

「動かないでもらいたい」

すでに銃口は影山雄蔵に向けられていた。おそらく昨日の朝にあつた偽者だろう。それでも瑠流斗には構わなかった。

偽雄蔵は怯えきつた様子で後退りをした。

「どうやってここに……このフロアは特別な人間しか……」

「この会社のシステムと、警備会社のシステムにハッキングさせてもらったよ。偽造ID、偽造カードキー、暗証番号も全て記憶させてもらった」

「そんなバカな……」

「バカなと言われても、現にボクはここにいる。ところで、機械人形は返してもらったけど、ハードディスクがまだだ」

まだ下ろされていなかった銃のハンマーが下ろされた。あとは引き金を引くだけだ。

偽雄蔵の顔から大量の汗が噴出した。今にも脱水症状で倒れそうな、蒼白い顔をしてわなわな唇を震わせている。

「ハードディスクはここにはない」

「どこにあるんだい？」

「この会社の中にはある。専門の部署でパスワードの解析中だと聞いた」

「ふむ、まだ中身を見れていないのか、残念だ。ならいいことを教えてあげよう。あのハードディスクはダミーだよ、しかも間違ったパスワードのダミーも用意してある。間違った方法、もしくは無理やり中身を見ようとすると、ウイルスが作動する仕組みになっている」

そして、瑠流斗は銃を撃った。

弾は偽雄蔵の腹を貫いた。

腹を押さえて蹲る偽雄蔵の顔に苦悶が浮かぶ。

「こ、殺さないで……くれ……」

すぐに病院に運べば助かるだろう。

しかし、誰が病院に連絡をする？

瑠流斗は微笑んだ。

再び銃声が鳴り響いた。

今度は偽雄蔵の太腿が血を噴いた。

銃弾をリロードしながら瑠流斗は淡々と言う。

「実はね、とてもボクは機嫌が悪い」

リロードを終え、銃弾が連続して放たれた。

無事だった脚の膝が打ち抜かれ、両手首も撃ち抜かれた。

「部屋が荒らされたことも腹が立つが、アリス君が攫われたと知った瞬間、この喧嘩を買うと決めたよ」

躰中を撃ち抜かれながらも、偽雄蔵は這いつくばって逃げようとしていた。

「逃がさないよ」

銃弾が偽雄蔵の背中を貫いた。当たった場所は心臓ではなかったが、まったく動く気配を見せない。

「……しまった、間違つて殺してしまった」

そう言いながら弾切れになる前にリロードしていると、会長室に三人の男が飛び込んできた。

「会長！」

と、叫んだ男が後頭部から脳漿を噴いた。

銃弾はあと二発放たれ、すべて男たちの頭を貫通した。

だんだんと死体の山が築かれてきた。

だが、溜流斗は不満そうな顔をしている。

「魔導関連の会社なら、それらしい戦闘法で来て欲しいものだね。例えば優秀な魔導士とか」

会長室を出るとすぐに左右の廊下から、銃を持った男たちが駆け寄ってきた。

男の数は五人。抜かれたオートピストルの数も同じ。ただし、撃たれた銃弾は数知れない。

溜流斗は構わず銃弾を全て躰で受けた。

「銃弾の無駄だよ」

ゆつたりとした動作で溜流斗は銃弾を放ち、確実に狙いをつ

けて一人ずつ殺した。

廊下は香で満たされ、静かな月のような瑠流斗は微笑んだ。このビルにいる者を皆殺しにしてやってもいいが、そこまで事を大きくして帝都警察を全面的に敵に回す必要もない。長居をすればビルを取り囲まれるだろう。

瑠流斗は身を隠すことにした。

屋上に出ると、猛烈な雨が降っていた。高度が高いこともあり、まるで雨は台風のようなようだ。

瑠流斗は身を乗り出して隣のビルを見た。距離はおよそ一五メートル、高度は一〇メートル下だろうか。助走をつければ瑠流斗なら飛べるだろう。

助走をつけようと縁から下がったとき、真後ろで人の気配を感じた。

吹き付ける雨に視界を奪われながら、瑠流斗はその男を見た。黒いスーツを着た男。服装は平凡だが鋭い眼と漲るオーラが、戦闘型だと物語っている。

武器はなんだ？

黒スーツは白い手袋を嵌めていた。そこに描かれる魔法陣。

瑠流斗は紅い口で微笑んだ。

先に攻撃を仕掛けたのは瑠流斗。リボルバーを抜いて通常の銃弾を放った。

黒スーツはなにか呟き、小さな魔法壁を張る。銃弾は全てそれに弾かれてしまった。

魔法壁が瑠流斗に向かって投げられた。瞬時にして盾が攻撃



に転じ、フリスビーとなって瑠流斗に襲い来る。

濡れたコンクリの床に飛び込み躲す瑠流斗。その一瞬に、撃つてない銃弾と空薬莖を全て抜いて、床を転がりながら呪弾を装填した。

呪弾が放たれた。

雨の中を呻き声が抜ける。

黒スーツの踏ん張った足が水を四散させる。

魔法壁が呪弾を受けた。中和されたように呪弾の呻きや叫びが消えた。

再び放たれた呪弾もやはり防がれたが、次はすでに放たれていた。防いだばかりの魔法壁に、連続して呪弾が撃ち込まれる。しかし、結果は同じだった。

黒スーツは無傷のまま。それに比べて瑠流斗の手は紫色に変色していた。腐っているのだ。驚異的な治癒力を持つ瑠流斗でさえ、強力な呪弾を使えば使うほど、呪いによって負傷して治りが遅くなる。

中距離戦から瑠流斗は近距離戦に作戦を変更した。

水を蹴り上げながら瑠流斗が駆けた。

フリスビーが瑠流斗の肩を切った。通常の物理攻撃に比べ治りが遅い。

瑠流斗は構わずそのまま黒スーツに向かつていく。

「ダーククロウ！」

瑠流斗の手に宿る暗黒の爪。

空かさず瑠流斗は次の魔導を詠唱する。

「シャドービハインド！」

黒スーツの視界から瑠流斗が一瞬にして消えた。

殺気は真後ろからした。

振り下ろされる暗黒の爪を黒スーツは魔法壁で受けた。

瑠流斗は笑った。ここまで敵がやるとは思わなかったからだ。

瑠流斗は嬉しかった。

「人間にしては上出来だ」

褒められた黒スーツは黙したままだった。おしゃべりは嫌いらしい。蹴りを放ってきた。

相手の蹴りを腕で受けた瑠流斗が大きく飛ばされた。

小さな水飛沫を上げながら瑠流斗は床を転がった。それでも

瑠流斗は淡々と冷静に攻撃を見極めた。

「ふむ、靴になにか仕込んであるね」

靴には魔石と呪文が仕込まれており、反発力が強くなる仕様になっていた。

まだ地面に肩膝を立てている瑠流斗に向かって、黒スーツが一步の跳躍で飛び掛かってきた。その距離は六メートル以上。

通常、助走なしで飛べる距離ではない。

空中からフリスビーが放たれた。軽い身のこなしでそれを避けた瑠流斗は地面を蹴った。

黒スーツが地面に着地した直後に、瑠流斗はその懐に飛び込んでいた。

魔法陣に描かれた手袋が拳を作った。対する瑠流斗のダーククローウ。



トルの地上に落下した。

もう黒スーツの記憶は瑠流斗から抹消された。死んだ人間など興味がない。

助走をつけた瑠流斗が隣のビルに飛んだ。まるで魔鳥のような飛空だ。

瑠流斗はすぐに身を低くして、淵から身を乗り出して地上の様子を探った。

警察が来ると予想されたが、それらしい車両も覆面パトカーもないようだ。事を隠密にするために、通報されていない可能性もある。

パトカーよりも早く、サイレンを鳴らして到着したのは救急車だった。どうやら殺したうちの誰かが搬送だれるらしい。

しかし、ここで疑問が浮かぶ。

確実に殺したはずだ。その場合、病院に搬送されるのではなく、警察の現場検証が先のはずだ。病死でなく殺人ならなおさらのこと。

瑠流斗は屋上から地上に飛び降り、すぐに隠してあったオートバイに乗り、走り出す救急車の後を追った。

あの救急車、なにか臭うのだ。

救急車は最寄りの病院ではなく、少し離れた個人病院 李  
外科に辿り着いた。

ここまで瑠流斗が追ってきた理由は勘だった。長い年月の間に培ってきた第六勘。人間よりも動物に近い、いやそれ以上の超感覚。

ロビーから入れば小さな病院だ、すぐにこちらの動きが相手の耳に入るだろう。

瑠流斗は通気口から侵入することにした。

薬品や血の香りを鋭く嗅覚で感じ、その中に瑠流斗は偽雄蔵の臭いを感じていた。

静かに身を潜めながら、裏路地のような入り組んだ路を進む。静かな病院内は少しの物音でも響いてしまう。

路の先に明かりが見えてきた。偽雄蔵の臭いが強くなった。ここが終点のようだ。

柵状の隙間から中の様子を探る。

看護師たちが手術の準備をしているようだった。手術台に寝かされているのは、やはり偽雄蔵。そして、なぜか手術台は二つ もう一人男が寝かされていた。

出頭医が手術室に入ってきた。どうやら二人いるらしい。死んでいる人間にしては、大掛かりな手術のようだ。

手術台に二人いるということは、移植と考えて間違いないだ

ろう。しかし、なにを移植する？

メスは男の顔に入った。行なわれた手術は顔面移植手術だった。

この手術がはじめて世界で成功したのは、およそ一八か一九年前のフランス。一五時間に及ぶ手術で顔の下半分が移植された。歳月の経った今では、顔全体の移植も容易となり、手術時間も大幅に短縮されている。

顔面移植とは、単純に皮膚を移植すればいい話ではない。それは顔面移植とは言わない。皮膚組織、筋肉、動脈から静脈に至るまで、骨以外を移植しなくていけないのだ。

数時間に及ぶ手術を溜流斗は身動き一つせず見守った。

死亡した偽雄蔵の顔と移植先の男の顔は、別々の医師によって同時に切り離された。

手術の間、魔導医が出血と血圧低下を抑えるため、移植先の男に念を送っている。

完璧な顔の複製をするために、骨格も弄られているようだ。

効率よく手術は運んだが、それでも数時間、ついに手術は完了した。

新たな偽雄蔵が運ばれていく。おそらく特別病棟の集中治療室かどこか、術後の安定が見られるまで隔離状態だろう。

手術の出来に興味が湧いた溜流斗は、通気口を辿って新偽雄蔵の臭いを探った。

すぐに新偽雄蔵が眠っている個室を見つけ出した。

ビニールシートで囲まれたベッドで眠る新偽雄蔵の姿が、通

「気口の隙間から見る事が出来た。おそらく今日は目を覚まさないだろう。」

病室には医師と看護師が二人。点滴の準備などをしながら、患者の様子を観察している。

医師が深く頷いた。どうやら手術結果は良好らしい。

扉が閉まる音がして、医師たちが消えた後に、瑠流斗は通気口を開けた。病室に降り、眠りに付く新偽雄蔵を観察する。

顔全体に包帯が巻かれ、その上から呪符が貼られている。おそらくこの呪符は、治癒力を上げる効果と、移植による拒絶反応を抑える効果がある。

部屋の外から気配がした。廊下を歩く靴の音は　おそらく男の歩き方だ。瑠流斗はすぐにロッカーの中に身を潜めた。

瑠流斗は耳に神経を集中させた。入って来た足音はひとつ。ベッドの前で止まった様子だ。

「手術は成功したかね？」

「はい、完璧です。あとは手術痕が薄くなれば人前に出られるかと」

入って来た足音はひとつ。なのに声は二重音声だった。

寝ていたはずの新偽雄蔵がしゃべったのか？

それとも別の誰かがいるのか？

瑠流斗は気配を探った。生き物の気配はなく、霊的な気配も感じない。だが、微かになにかの気配を感じる。

「どのくらいでこいつは人前に出られそуд？」

「一週間もあれば十分かと、薄っすらと残る傷痕はメイクで誤

魔化せるでしょう」

「そうか、一週間なら海外に出張ということでは片付くな。包帯を取る日になったら、また連絡をくれ」

「はい、わかりました」

瑠流斗の張り巡らされた思考は一点に集約した。そして、瑠流斗はロツカーを飛び出す。

「影山雄蔵だね？」

その問いかけをした一瞬、今までなかった気配がした。

瑠流斗は瞬時に辺りを見回した。医師、偽雄蔵、そしてドアに映る人影。

ドアが開き、足音もさせずに影が逃げた。

逃げた影を追いながら瑠流斗は呟く。

「やはり父親と同じ体質の持ち主か……」

人影は廊下の角を曲がり、瑠流斗もすぐに後を追った。

姿なき逃亡者。確認できるのは影のみ。だが、角を曲がると影すらも消えていた。

気配はどこだ？

人間の気配、死者の気配、多くの気配が混在して、影の気配が掴めない。

まんまと逃げられた。だが、もうひとりには逃がさない。

瑠流斗は病室に急いで戻った。病室の中を確認すると、すぐに別の場所に走った。

大雨が降る野外駐車場。

白衣を着たままの男が車に乗り込もうとしていた。傘すら差



していない焦りようだ。この医師は雄蔵と病室で話していた男だ。

音もさせず瑠流斗は医師の背後に立った。そして、後頭部に銃口を突きつけた。

「下手な真似をしないことが長生きの秘訣だよ」

医師はゆっくりと両手をあげた。

そのまま瑠流斗は医師を車に運転席に押し込み、自分は助手席に乗り込んだ。

「シートを濡らして申し訳ない」

そう言いながら、銃口は医師に向けられたままだ。

医師は怯えて瑠流斗と顔を合わせようとしない。

「わ、私になんの用だ？」

「本物の影山雄蔵氏と話していましたね？」

「知らん！」

「惚けるだけ時間の無駄だよ。あれは絶対に影山雄蔵だ。ボクは彼の祖父に一回だけ会ったことがある……まるで同じだ」

固い唾を医師が咽喉を鳴らしながら呑み込んだ。

医師は黙り込んでしまったので、仕方なく瑠流斗は話を続ける。

「雄蔵本人が君と会っていたということは、それなりの深い関係と見ていい。ボクが思うに雄蔵本人と会うことができるのは、極僅かな人間しかいないはずだ。顔面移植手術の手並みを見せてもらったけど、君はなかなかの名医だね。もしかして、雄蔵の主治医かな？」

瑠流斗の耳には医師の鼓動が聴こえていた。明らかに心臓が脈打つ速さが変わった。

やはり医師はなにも答えなかった。

銃口がこめかみに付いた。

「黙秘ばかりだね。君はなぜ医者になったんだい？ 早死にするためじゃないだろう」

銃口は瞬時に下に向けられ、医師の太腿を撃ち抜いた。

「ギイ！」

歯を食いしばる医師。

まだ口を閉ざそうとする医師に瑠流斗はため息を吐いた。

「動脈は外したし、病院はすぐそこだ。ボクは殺し屋だけど、人を殺さない術も心得ていんだ。銃弾はあと五発あるよ？」

医師は出血する左太腿を押さえたまま、口を固く閉ざしてしまっている。

瑠流斗は銃口を右太腿に向けた。

「下面打通右脚！」

返事はなかった。そして、予告どおり右脚を撃ち抜いた。

「あと四発だよ。両手の甲を撃ち抜こうか？」

「……わかった、何でも話す」

「最初から素直に話してくれれば一発も撃たれずに済んだのに」

「煙草を吸ってもいいか？」

「どうぞ」

医師が口に煙草を加えると、瑠流斗はZIPPOを出して火

をつけた。

少し落ち着いた表情をする医師。

「お前の言うとおり、私は影山氏の主治医だ。なにが聞きたい？」

「彼は人間ではない。いや、人間とは呼べないね……影だから。彼は影だ、影が独立した存在として活動しているらしい」

「そうだ、影山氏の正体は影だ。だから人前にできることができず、偽者を使って会社を運営している」

「その辺りまでは全部知っているよ。問題は影ではなく本体、つまり肉体はどこにあるのかということさ」

「影山氏の一族は生まれたときから影だ」

「ふむ、先祖を遡って調べたい事柄だね」

影山雄蔵の真の姿は影。肉体を持たない影。生まれたときから影だというのだ。

「しかし、今はそれよりも知りたい事柄がある。影山雄蔵の連絡先だよ。はい、ケータイを出して」

瑠流斗は医師に向かって手を出した。

おもむろに医師がケータイを出そうとした瞬間、強い殺気が車内に満ちた。

瑠流斗は瞬時に振り返ったが、間に合わない！

咄嗟にガードした腕が闇色の刃物で斬られてしまった。

瑠流斗の腕から黒い血が噴き出る。斬られたのは瑠流斗ではない。瑠流斗の影だ。

黒い影は瑠流斗の真横を抜け、医師の心臓に闇色の刃物を突

き刺した。

瑠流斗が影を掴もうと手を伸ばす。だが、厚みを持たない影は、難なく車外に逃げてしまった。

影はおそらく影山雄蔵。まだ近くに潜伏していたのだ。

医師が持っていたケータイが消えていた。

瑠流斗はすぐに車外に飛び出すが、動く影は見当たらない。

大雨の中、瑠流斗の腕から流れる黒い血が、地面に堕ちて墨汁のように広がる。

「実に不愉快だ。ボクにこんな傷を負わせるなんて、ただじゃ置かないぞ」

腕の傷は一向に塞がることなく、血の勢いも留まることを知らなかった。

ミヤ区某所の大邸宅に瑠流斗は来ていた。

ボディチェックをした男は瑠流斗の格好に少し変な顔をした。だが、そのまま瑠流斗はもつとも奥の部屋へと通されることとなった。

光がまったく届かない部屋。明かりもつけずに、そこに潜む者は……？

「なんのようじゃな？」

「息子さんに不意を衝かれました」

互いの顔すら見えない闇での会話。いや、瑠流斗の相手には最初から顔などないのかもしれない。

瑠流斗は影山源三郎の大邸宅に来ていた。おそらく、目の前

にいるのは源三郎本人。闇に紛れてなにも見えないが。

源三郎は低く笑った。

「その格好はなんじゃ？」

闇の中にあっても、相手には瑠流斗が見えているらしい。

「ですから、息子さんに不意を衝かれました」

闇の中でわからないが、瑠流斗は片手にバケツを持っていた。

一向に治まらない血を、そこに溜めているのだ。

「以前にあったときよりも、顔色も優れないようじゃな」

「慢性的な貧血です。この腕から流れる血が治まらない限り、

ボクは常に疲労と貧血に襲われることになるでしょう」

「病院には行ったのかね？」

「病院よりも、ここに来るのが確実だと思ひまして、参上いたしました」

「賢明な判断じゃ」

「瑠流斗は脅威の自然治癒力を持っている。物理攻撃よりも、

魔法攻撃が直りにくく、特別な魔法などの類となるとなおさら

だ。

だ。

しかし、今回の場合はその治癒力が仇となった。

血がいくら流れようと死ぬことはなく、常に流れた分の血が

躰で製造される。瑠流斗の体力を奪いながら。無から有は創

れない。血を作るためには瑠流斗の躰にあるエネルギーが必要

なのだ。

「お話中、申し訳ありませんが、少し無作法なことをさせてい

ただきます。このままでは顔がやつれてしまうので」

と、瑠流斗は言つて、バケツの中に手を突っ込み、中に入っていたコップで血を掬った。

そして、それが当然の行動のように飲んだのだ。一滴たりともムダにせず咽喉に流し、バケツの血が浅くなつたところで、手についた血も全て舐め取つた。

「これでしばらく大丈夫です」

暗闇の中で瑠流斗は静かに微笑んだ。

血を作るためにはエネルギーを摂取せねばならない。流れた血を呑むことによつて、循環させているのだ。

瑠流斗は事を終えて話を続ける。

「ボクが訊きたいことはただひとつ。この傷を治す方法です。このままでは普段の生活に支障が出てしまいます」

「その傷は物理的な方法では治せんよ。縫い合わせても、なにをしても徒労に終わる」

「では魔導医に頼めと？」

「それも無理じゃな。その傷はお前さんの影が負つた傷。影が負つた傷は、影を治療せにゃならん」

「ふむ、ではさっそく貴方に治療をお願いしたいと思います」  
影が負つた傷は影にしか治せないと、瑠流斗は判断したのだ。  
だが返つてきた答えは。

「無理じゃ」

切り捨てるような答えだった。

コップに注いだ自分の血を呑み、一息ついた瑠流斗が尋ねる。  
「なぜです？」

「道具がない。影を治療するには、影の道具は必要なのじゃよ」

「理にかなっていませんね。その道具はどこに行けば手に入りますか？」

「以前はわしが所有しておったのじゃが、雄蔵に盗まれてしまった」

「予備はないんですか？ それともそれを作っている人を紹介してもらえませんか？」

「予備はない。道具を作る技術も持った者も、現世には存在しておらん」

「そうですか、参考になりました。それでは失礼します」  
成果はほとんどない。結局は雄蔵を探さなくてはいけないということだ。

しかし、瑠流斗は雄蔵を探すことを中断して、別の場所に向かうことにした。

源三郎の大邸宅を後にした瑠流斗は、片手にバケツを持ったままタクシーに乗り、瑠流斗の主治医がいる病院に向かった。

タクシーの中でも幾度となく血を呑み、バックミラー越しに見る運転手の顔が不気味そうだった。

ホウジユ区の奥にある個人病院。見た目は寂れているが、人の出入りが激しい病院だ。

診察室に通され、簡単な診察をしたあとに瀧沼医師が言った言葉は、

「切断して、サイボーグの腕を取り付けるか？」

だった。

瑠流斗は呆れたようにため息を吐いた。

「それでもボクの主治医か……腕を切断したところで、ボクの腕は再生する。機械化した部位は邪魔者でしかありえない」

「ならば、切断すれば傷も消えるのではないか？」

サングラスをした瀧沼は平然と言った。

「それはもうやったよ。腕を斬ったら、傷口ごと再生しただけだった」

「ではなぜここに来た？」

「ここが病院だからだよ」

もつともな言い分だった。

主治医とは言うが、瑠流斗がここに来ることは稀だ。負傷しなくてもすぐに治る。大抵の傷や病気ではここに来る必用がないからだ。けれど、来る時に限っていつも難題を抱えてくる。

瑠流斗の要求はこれだ。

「出た血をバケツではなく、体内に直接戻す機関が欲しいんだ。身に針を突き刺すような輸血ではダメだよ。針はボクの躰からすぐに排泄されてしまうからね」

例えば、瑠流斗の銃弾が躰に残っていた場合、それは自然に体外へ排出される。輸血よりの針を手首に刺しただけでも、針は自然と外に排出されてしまうのだ。腕をサイボーグにしても同じ現象が起こる。絶対的な治癒力を持つ弊害なのだ。

そのため、傷口を縫うことも不可能だ。そもそも、この傷は縫っても塞がることはない。



診察の最中も瑠流斗は自分の血を飲んでた。これではろくに戦うこともできない。

相談を受けている瀧沼はだいぶ頭を悩ませた。躰に“刺す”という行為以外で、血を体内に戻す方法を要求されている。

「縫うことができないのなら、テーピングで固定して、その上から強化セラミックでさらに固定するか？」

「ボクの再生力が強ければ、血液の圧力でセラミックがぶっ飛ぶね。逆なら、ボクの腕が膨れ上がって爆発」

おそらく後者だ。そして、腕は再生する 傷を残して。

存在しない人間の痕跡を辿るのは容易ではない。

生まれたときから影である存在。戸籍上は存在しているが、戸籍を辿っても本人には行き着かない。

手がかりだった医者は死に、ケータイも持ち去られてしまった。

しかし、まだ手が無いわけではない。

かつて帝都を賑わせた伝説のハツカーと聞いて、少しでもその手の話に興味がある者ならば、フェアリーテールというハンドルネームを上げるだろう。一時期、捕まったという報道がされたが、その真意は定かではなく、死亡説やツインタワーの情報屋がそいつだという噂もある。

だが、マニアの間や裏社会の通じた者ならば、別の名を挙げるだろう。ルシフェル。それは実在するかもわからない、ハツカーのハンドルネーム。その名を知っていても、存在を信じる者と噂話だと笑う者がいる、まさにこちらこそ伝説に相応しい存在だ。

フェアリーテールが派手な活動をしていた時期、その陰に潜みハッキング活動をしていたというルシフェル。フェアリーテールがハッキングの証拠をワザと残し、自分の存在を誇示していたのとは対照的に、ルシフェルはその存在を世に決して出さない。そのため、どんなハッキングをしたのか、それはすべて

推測の域を出ず、ルシフェルの存在自体が疑われている要因となっている。

謎の存在だったルシフェルの名が世に出てしまったのは、とある掲示板にフェアリーテールと名乗る者が書き込んだ内容。その書き込みよると、彼はネットワーク上でたまたまルシフェルと遭ったのだという。だが、その書き込みの真意は今もわからない。

瑠流斗は一等地に建つ高級マンションに来ていた。

訪れた部屋は一階の角部屋。ネームプレートは出ていない。

ドアの鍵はカードキーだった。それは瑠流斗に好都合である。挿して回す鍵のほうが、よっぽど偽造が大変だ。

鍵を開けて瑠流斗は一気に踏み込んだ。

部屋の中は暗い、そしてテレビの音がした。

真っ暗な部屋で消し忘れたテレビ。いや、消し忘れたのではなく、見ている者がいるのだ。

何者かの声が闇に響く。

「どうしてここがわかった？」

それは雄蔵の声だった。

「時間帯を絞って李医師の通話記録を調べたんだよ。この部屋から掛けるなんて不注意にもほどがある。それと近くの住人の話も少し聴いた。この部屋の住人は幽霊じゃないかって噂話があるのを知っていたかい？」

瑠流斗の眼は部屋に配られていた。

実はこの場所にある気配は、瑠流斗を抜かしても複数あった。

ブレーカーが落ちた。テレビの明かりすらも消えた。

瑠流斗の眼に映ったのは二人。別の部屋から気配を消しながら出てきた者が三人。雄蔵を含めると、敵の数はおそらく六人。暗視ゴーグルをつけた男が、ナイフを振りかざして襲ってきた。

瑠流斗はそれを腕で受けた。正確には腕に付けられた筒状の金属部だ。

負傷していた瑠流斗の腕には大きな筒がはめられていた。そして、それにはストローがついている。つまり、この筒に溜まった血液を定期的に飲んで、排出しろということなのである。アナログで滑稽な器具だが、バケツとどちらがマシなのかは、個人の判断に委ねられる。

瑠流斗のリバルバーが火を噴いた。狙いはすべて頭。

男たちが一瞬の呻きを発して次々と倒れていく。

五発目の弾丸が的外れた。当たったのは男の胸だ。けれど、負傷した様子はない。防弾チョッキを着ているのだ。

ナイフが瑠流斗の腹を抉った。それは男の最期の攻撃となった。この近距離で銃弾を躲す術はない。

六発目の銃弾が部屋に鳴り響いた。

気配は全て消えた。

「影山雄蔵？」

瑠流斗は名を呼んだ。

反応も気配もしなかった。

夜目の利く瑠流斗だが、同じ色をしたモノは見分けが付かな

い。今、この部屋に雄蔵がいてもわからない。

瑠流斗はブレイカーを上げて、部屋中の電気を点けて回った。やはりどこにも怪しい影はいない。瑠流斗が男どもの相手をしている最中に逃げたのだ。今から追いかけてもムダだろう。

瑠流斗は部屋を調べることにした。

家具などは必要最低限しかなく、衣服はなにひとつなかった。だが、クローゼットにはモノが入っていた。小さな鉄の金庫だ。ダイヤル式の金庫を前にして、瑠流斗は唸り声をあげてしまった。

「困った……アナログだ」

ダイヤルを回すアナログ式の金庫。瑠流斗の専門外だった。

瑠流斗はストローをチュウチュウしながら、次の作戦を考えることにした。

金庫をハウジユ区でその道のプロに開けてもらい、瑠流斗は中身を持って再び源三郎の大邸宅を訪ねていた。

「これですね？」

と、瑠流斗は言いながら木箱を源三郎に差し出した。

「おお、これじゃ、よく取り戻してくれた」

「別料金はいただきますせん。その代わり……」

「傷を治せというのじゃな？」

「はい」

金庫の中身は源三郎の元から盗まれた手術道具だった。

すぐに手術は行なわれることになった。

手術の場所は座敷。患者はもちろん瑠流斗。そして、手術をするのは源三郎だ。

手術中も部屋は闇だった。

そこに立って傷を負った腕を上げると命令された。それで影の手術をするのだと言う。

しかし、ここは闇だ。

光が当たれなければ影はできないはず。

そんな常識は源三郎の前では通用しなかった。瑠流斗の影はたしかに治療され、本体が負っていた傷は跡形もなく消えていた。

光がなくなると影は存在する。それを証明しているのは源三郎本人だ。彼は闇に包まれた部屋にも存在している。

瑠流斗は治った傷を見ながら神妙な顔つきをした。

「影とは物体が光を遮ったときにできるものだと思うかもしれませんが、どうやら違うようですね」

「物体が光を遮り生じるものではなく、はじめから存在していたものが見えるようになったに過ぎん」

「光ありきの存在ではなく、はじめから存在していた。相対するものは、はじめから存在する、そこに真の優劣はないという真理か……」

ならばやはり……。

瑠流斗は脳裏にある疑問が浮かんだ。

「源三郎氏、貴方は影であらせられる。なら、肉体はどこです？」

「わしは生まれたときから影じゃ」

「本当にそうでしょうか？」

「なぜ疑う？」

「光ありきの闇は間違っています。ですが、光ありきの闇、闇ありきの光、これが正しい答えでしょう。対義語として一般に認識されているものだけでなく、すべての存在は相対するモノを持つている。ヒトに相対するものは、そのヒトの影です」

「ただの思想と推測に過ぎぬ」

「そうですか……」

ならばここにもう用はない。瑠流斗は源三郎に別れを告げ、大邸宅を離れた。

夜になっても雨は降り続いていた。

すでに雄蔵の居場所はつかめている。いつ、どうやって、その問いは瑠流斗がマンシヨンの部屋に踏み込む前だ。

あのマンシヨンには駐車場があった。駐車場を借りている場合、普通は車を止める場所が決まっている。雄蔵がどこに車を止めているかを調べ、車にあらかじめ発信機をつけて置いた。それだけのことだ。

発信機を辿ってやって来たのは、カミハラ区の東　ホウジユ区よりの場所にある駅前。駅から少し離れた裏通りにある小さなビルの前に来た。

ビルの一階は駐車場。階段は下と上。影はどちらに好むかを考え、瑠流斗は地下に下りた。

瑠流斗の前に立ちはだかる金属の扉。まるで金庫のような頑丈そうな扉だ。

鍵はカードキーと暗証番号。下準備なしでは開きそうもない。瑠流斗は階段を上りはじめた。それとは逆に下りてくる足音が聴こえた。

リボルバーを構えた瑠流斗は相手を確認せずに撃った。二発。階段を転げ落ちた男の二人だ。

死んだ男たちはサイレンサー付きの銃を持っていた。相手もこちらを殺す気だったらしい。

ビルに入っただけなのに、防犯カメラがあつたことに瑠流斗は気付いていた。

三人目以降が来る前に瑠流斗は二階の事務所に踏み込もうとした。

ドアの鍵に弾丸を二、三発撃ち込んで壊し、足の裏でドアを蹴破った。

待ち伏せしていた男たちが一斉に銃を撃った。

銃弾を躰で受けながら、瑠流斗は一人ずつ確実に殺していく。最後に残った一人が事務所の奥に逃げる。

瑠流斗は逃げる男の足を撃ち抜いた。ドアにもたれながら倒れる男。瑠流斗はゆっくりとその男に近づいた。

落ちた銃を拾おうと伸ばした男の手を瑠流斗の足が踏んだ。骨の折れる音が響いた。複雑骨折だろう。

「地下室のドアを開けて欲しい」

「俺には無理だ……ギャツ！」



踏み潰されている手に足の裏がねじ込まれた。

「“開けて欲しい”が、“開ける”に変わる前に開けるんだ”  
”外の鍵は開けられる……けど内鍵は開けられねえよ”

「ふむ、用心深いことだ。なら外だけでいい、開けて欲しい”  
”男に銃を突きつけながら歩かせ、カードキーと暗証番号を聞きだした。

早速、瑠流斗は地下室に下りてドアの鍵を開けた。だが、問題はこれからだ。

「おそらく核シエルター並みだろうね”

つまり、雄蔵にとってここは最後の砦なのだ。

問題は持久戦となったとき、雄蔵はどのくらいの月日の中で  
過ごせるか？

一ヶ月か、一年か、それとも一〇年か？

中にはそれなりの通信設備が整っているだろう。そうなると、  
中から外に指示を出すことは可能だ。だが、この砦は壊せなく  
とも、回線程度ならどうとでもなる。完全に雄蔵を孤立させる  
ことなど、容易いことだ。

最終的な手段を取れば、入り口を溶接して固めてしまえばい  
い。

しかし、あくまで瑠流斗の受けた依頼内容は“殺し”だ。中  
に入る方法を探すか、もしくは日本神話の天岩戸のエピソード  
のように、どうにかして外に出せる方法を探せなくてはならな  
い。瑠流斗はプロだ。

この帝都ならば、いくらでも方法はある。

以前、強盗団のニュースが連日世間を賑わせていたことがあった。そのグループが数々の犯行を成功させた裏には、ある男の存在があったからだと後々わかった。その男とは物体透過能力を持っていたのだ。

現在、特別な能力を持つ者の多くは、帝都の監視下にある。物体透過能力など、野放しにできる能力ではない。だが、それでも人の多く集まる帝都には、監視下を免れている能力者がいることも事実。

瑠流斗はケータイをポケットから出し、どこかに電話を掛けた。

「もしもし、仕事を頼みたい」

ある能力者をここに呼ぶ気なのだ。

瑠流斗は二箇所を電話を掛け、数十分で来ると連絡を受けた。それまでの間、扉の前で片時も離れず待機することにした。

だが、敵はそれを許してくれなかった。

身を潜めているのだろう。だが、殺気を孕んだ空気が漂っている。何者かが階段の折り返したすぐそこにいる。

壁の向こうに隠れていた男が姿を現し、いきなり発砲してきた。

連射銃弾の多くは瑠流斗から外れ、男はすぐにまた壁の向こうに隠れた。

瑠流斗はリボルバーを構えた。

また男が姿を見せた。その一瞬を瑠流斗は逃さない。

瑠流斗の撃った弾丸は男の腕を撃ち抜いた。だが、致命傷に

はならずまた男は姿を隠す。

これでは埒が明かないと瑠流斗が歩き出す。

そのとき、壁の向こうから手だけが出た。握っているのは

手榴弾だ！

瑠流斗のいる場所は二平方メートルほどあるが、とても手榴弾の爆発を避けられるスペースなどない。

手榴弾は地面に付く前に爆発した。

大量の煙幕が狭い空間を一気に制圧して、視界から何もかも奪った。

あんな近距離の爆発に巻き込まれては、さすがの瑠流斗でもただでは済まない。普通の人間でも四肢が吹き飛び、躰はバラバラになるだろう。

爆発の後はとても静かだった。

やがて煙が徐々に治まり、ハンカチを口に当てた男が、瑠流斗の様子を見に来た。

男の足元まで浸る浅瀬のような黒い血。もげた腕が無残にも床に転がり、両腕を失い片足がもげかかった瑠流斗が、びくりともせずうつ伏せに倒れていた。

煙の中ではあまり良く見えず、男は静かな足取り瑠流斗に近づこうとした。

しかし、その足が急に動かなくなった。

物理的に動きを封じられたのではなく、それは恐怖だった。

本能的に感じた恐ろしい恐怖。

瑠流斗のもげかかっていた脚が再生する。

そして、嗤い声が響いた。

「クククッ……」

瑠流斗の両腕が一瞬にして生えた。

そして、顔面に紅黒い血化粧した瑠流斗が立ち上がる。

全身から血を滴らせ、白銀の美しい髪も、紅黒く染まっている。まるで瑠流斗ではないようだ。そこに別人が立っているようだった。

眼にも留まらぬ速さで瑠流斗が動いた。

動けない男の咽喉を瑠流斗の爪が抉った。そのまま瑠流斗は男の頸動脈を噛み切った。

首から噴き出る血を浴びながら、瑠流斗は死んだ男の上着を剥ぎ取り、腹に手を突き刺し内臓を引っ張り出して喰いはじめた。

まさに狂気の沙汰。

餓えた肉食獣のように、獲物の内臓から喰らった。

戻らぬ男のことが心配になった別の男が様子を見に来た。だが、その悲惨な光景を目の当たりにするや、背中を見せて逃げようとした。

逃げる男の背中に瑠流斗が飛び掛かった。そのまま首を一気にへし折り、首を一回転させてもいだ。

生首を持ちながら、瑠流斗は一階の駐車場に上がった。

生臭い臭いが辺りに立ち込めた。

瑠流斗を見た男たちが生唾を飲んで凍りついた。そして、一人の男の足元に放り投げられた生首。

男たちは狂乱した。

持っていた銃を乱射する。

銃弾を受けながら瑠流斗は一人の男に襲い掛かり、首を挟んで一気に仕留める。

瑠流斗は次々と男たちを惨殺していく。

肉を抉られた屍体から流れる血を嗅ぎ、瑠流斗は狂気の嗤いを浮かべた。

「……まだ血と肉が足りない」

逃げようとしていた男の髪を瑠流斗は鷲掴みにして、顔を上に向かせるとそのまま眼に指を突き刺した。

眼を潰された男は絶叫しながら走り出し、コンクリの壁に頭を激突させて死んだ。

辺りから物音が消えた。

瑠流斗の耳が微かに動く。

「……あとひとり、子羊がいるな」

ぴちゃぴちゃと血の上を歩きながら、瑠流斗はゆっくりと獲物に近づいた。

最後の男は車の影にしゃがんでいた。

瑠流斗が現れても、男は焦点の合わない目で床を見つめるばかり。完全に正気を失っていた。

男の前に肩膝をついた瑠流斗は、恋人にするように優しく男の顎を手に乗せ、自分の顔に相手の顔を向けて微笑んだ。

「君は綺麗な眼をしている」

男は震えたまま逃げようとしなかった。

瑠流斗の長い指が男の瞼を触れた。男は声にならない悲鳴をあげた。そして、そのまま瑠流斗の指はずぶずぶとめり込み、男の瞳を抉り出したのだ。

男は残された瞳を見開き見てしまった。

瑠流斗はなんと男の眼の前で眼球を口に含み、舌で転がしたあと呑み込んだのだ。

そして、再び瑠流斗の指は男の眼を抉り出したのだった。

呼ばれた二人の男は、その臭いを嗅いだ瞬間に吐き気を催し、その光景を目の当たりにした瞬間に、胃の内容物を全て吐き出した。

肉を抉られ手足をもがれ、腸を引っ張り出された男たちの屍体が、山になって壁際に積まれていた。

「清掃員を呼ぶ暇がなくてね」

と、物陰から現れた瑠流斗が言った。

瑠流斗は事務所に置いてあったスーツに着替え、何事もなかったような顔つきだ。だが、すぐそこには屍体の山がある。

呼ばれた二人の名前は、黒い瞳の白人男性サリヴァンと、松田という冴えない男だ。

二人はすぐに地下室の前まで案内された。

「内側から鍵がかかっているらしいから、二人で協力して開けてくれないかい？」

瑠流斗の要請にまず動いたのはサリヴァンだった。

眼を細めて厚い扉をじっと睨む。

「船の舵のような物がここの真裏にある。だいたい距離は三〇センチ先だろう。それを回せば鍵は開きそうだ」

流暢な日本語でサリヴァンは言った。そう、彼の能力は透視なのだ。

そして、松田の能力は？

頭を掻いてから松田は大きなあくびして、やる気のなさそうな感じで、軽く手に力をこめはじめた。

松田の手が震え、すぐに一気に力が抜けた。

「重すぎて開かないなあ」

声までやる気がない。

サリヴァンの平手が松田の頭を引っぱたいた。

「しっかりやれ！」

「うい、ちゃんとやりますよー」

やっぱりやる気のない顔で松田は再び手に力を込めはじめた。扉の取っ手を握っていた瑠流斗の手が動いた。ゆっくりと扉が開く。

松田は瑠流斗を見てニヤリとした。

「開けたぜ」

この男の能力は念動力。手を使わずに物体を動かす能力者なのだ。

瑠流斗は二人に顔を向けて言う。

「料金はあとで払うよ。今は早くこの場所を離れたほうがいい、また銃を持ったやつらが押し寄せてくるまえにね」

その言葉にサリヴァンは背筋を凍らせた。駐車場の屍体が脳裏に過ぎってしまった。あんな殺戮が行なわれる現場に居合わせたくない。

「そうだな、私たちは先に帰らせてもらおう」

サリヴァンと松田は瑠流斗を残して姿を消した。

重く分厚い扉を開けて、瑠流斗は部屋の中に侵入した。



すぐに扉を閉めると、辺りは一筋の光もない闇に包まれる。扉を開けっ放しにしないのは、雄蔵を逃がさないためだ。けれど、その代わりに瑠流斗はなにも見えなかった。

「ついに追い詰めたよ、影山雄蔵」

闇の中を見ることはできる。だが、闇と同化している者は見えない。

声は闇の中から返ってきた。

「まだ、追い詰められたわけではない。まだ私はこの闇に隠れている」

「そうだね」

「私を本当に殺せると思っているのか？」

「どうだろうね、やってみなくてはわからない」

いつもの口調、いつもと同じ顔、いつもの瑠流斗だった。

瑠流斗は一步前へ踏み出した。敵の気配を探る。しかし、なにも感じられない。

「私の居場所がわからんのかね？ わかったとしても私に攻撃を加えることは不可能だと思うがね」

「居場所が掴めないのは事実だね。声が反響しすぎて、声から場所を探ることができない」

「そうだろう、この部屋は特別製だからな」

雄蔵がしゃべるたびに、部屋中から声が聞こえ、それは山彦のように反響する。

瑠流斗がまた一步足を動かした。

「貴方は父上よりも用心深い。影でありながらも、さらに存在

を隠し続ける」

「そうだ私は生まれたときから影だ。表舞台には決して立つことができない」

「生まれたときから影か……それについてはまだ納得していない。たとえば、影がなければ本体は存在できると思ukai?」

「突然なにを言い出すんだ、質問の意図がわからんな」

「おそらく君自身も、源三郎氏も気付いていない事実」

瑠流斗が口元を緩めた。

影が震えた。

刹那 影が狂気を放つ。

「ぐぎゃあ！」

闇の中に木霊する悲痛な叫び。

また気配が消えた。

そして、すぐに雄蔵の声が聴こえる。

「どうして、どうしてだ！」

「なんのことかな？」

悪戯に瑠流斗は笑った。

「どうして私に攻撃を！」

「その問題に関しては、すでに解決済みだよ……はじめてボクが源三郎氏にあつた時点で」

瑠流斗は感覚を研ぎ覚ませた。

殺気を放つ一瞬、相手の気配が伝わる。つまり、影である雄蔵の気配はゼロではないということになる。今も、微かな気配がどこにあるはずだ。

音はない。空気の流れもない。声すらも聴こえなくなった。雄蔵はどこにいる？

部屋に光が差し込んだ。扉が開こうとしている、逃げる気だ！

少し開いた隙間から影が出て行った。すぐに部屋は闇に閉ざされ、瑠流斗は素早く扉を開けた。

逃げ足は聴こえない。それでも瑠流斗は階段を駆け上がった。瑠流斗は見た。床に走っているシルエットが映っている。そのシルエットを瑠流斗は追った。

雄蔵を追ってビルの外に出た。

降り続く雨と、夜の闇が雄蔵を隠す。だが、幸いなことに辺りのビル明かりや、風俗店の明かりが世界を照らしていた。

あそこまで追い詰めて、ここで逃がすわけにいかない。

一瞬たりとも雄蔵から目を離さず、瑠流斗は影を追い続けた。雄蔵はビルとビルの間逃げ込もうとしていた。

瑠流斗のリボルバーが叫びをあげた 怨霊呪弾だ。

呪弾が当たったかどうか、弾痕は壁を腐食させていた。

瑠流斗は感じていた。

怨霊の気配が少しずつ遠ざかっていく。それは呪弾から解き放たれた怨霊の気配だった。呪弾はたしかに雄蔵に当たっていたのだ。

呪弾がマーキングの代わりになり、瑠流斗は怨霊の気配を追って走り出した。

細いビルとビルの間を走り、大きな道路に出た。

右手は駅に続き明かりが強い。怨霊の気配は左からだ。いや、左だと思つた気配が、急に速度を上げて右に向かい、瑠流斗の眼の前を通り過ぎた。

車だ、雄蔵は車に乗り込んだのだ。シルバーの乗用車に雄蔵は乗っている。

運転手に気付かれることなく、雄蔵は後部座席に身を潜めていた。

車を追いかけて瑠流斗は走るが、さすがに車に追いつくことはできない。

瑠流斗の眼に対向車線に走ってくるオートバイが映つた。

瞬時に瑠流斗はオートバイの搭乗者にラリアット 相手の胸に自分の腕を打ち付けた。転倒したオートバイから男が投げ出せれ、瑠流斗は地面の上で痛がる男には眼もくれないで、オートバイを奪つて追跡劇を開始した。

アクセルを全開にして、雨の道路を駆け抜ける。

逃げる気のない車はすぐに見えてきた。

遠くに見える信号が赤に変わった。雄蔵を乗せたシルバーの車も止まる。これはチャンスだ。

瑠流斗はすぐに追いついて、車に横付けした。

しかし、潜んでいた雄蔵がその存在を明らかにして、運転手を脅したのだ。

「横にいるバイクから逃げろ。でないと、おまえを殺すぞ！」  
姿なき声に運転手は怯え、言われたとおりアクセルを踏んだ。  
シルバーの乗用車が車の列から抜け出し、信号を無視して雄

蔵を乗せたまま逃げ出した。

すぐに瑠流斗も信号を無視して、車の流れを縫いながら交差点を突破した。

駅前付近につれ交通量も増えてきた。

シルバーの車は駅を前にして左折した。いったいどこまで逃げ続けるつもりなのか。

瑠流斗がリボルバーを片手で構えた。

呪弾が叫び声をあげる。

しかし、狙いを外れて掠ることもなかった。

オートバイを運転したまま、動く物体に狙いを定めるのは至難の業だった。増してやりボルバーでは連射ができず、狙いを付けづらいデメリットがあった。

連射ができない要因は他にもある。呪弾は撃つたびに瑠流斗の手を犯すのだ。

オートバイに乗ったままでは弾の交換もままならない。

再び瑠流斗はリボルバーを構えて撃った。だが、また呪弾はどこかに消えた。

「……雨の日は特に調子が悪い」

土砂降りと暗い闇に紛れて、瑠流斗は白い息を吐いていた。その唇は紫色をしている。なんらかの体調異常をきたしていることは明らかだ。

リボルバーを構えた瑠流斗の手は微かに震えていた。

今度は時間をかけて狙いを定めた。

しかし、呪弾は瑠流斗を嘲笑うように狙いを外れ、交差点を

横切ろうとしていたタンクローリーに当たった。

高圧ガスが一気に大爆発を起こした。

激しい爆発音は鼓膜を震わせ、炎を山が辺りを明るく照らし、シルバーの車がハンドル切つてスピンのした。

次々と起こる玉突き事故。

濡れた道路にガソリンが漏れ、飛び火が引火して辺りは一瞬にして火の海となった。

ガソリンが垂れ流していた車が爆発した。

大事故となったこの場から、シルバーの車は再び逃走しようとしていた。

祝弾が叫ぶ。

ついに弾丸はシルバーの車に当たった。だが、トランクを腐食させただけだ。

リボルバーを握っている手は紫色に変色して、皮膚が崩れはじめていた。

仕方なく瑠流斗はリボルバーをしまつて、シルバーの車を追つた。

車の間を縫うように走るオートバイは、すぐにシルバーの車に追いついた。

シルバーの車の少し前に出て、瑠流斗はハンドルから両手を離すと、そのままボンネットに飛び乗った。

運転手が眼を剥いた。その首に突きつけられている闇色の刃物。そして、それを握っている影は後部座席にいた。

「奴を振り落とせ！」

雄蔵が叫んだ。

蛇行運転をはじめた車のボンネットにしゃがみ込む瑠流斗。

足場が濡れていてバランスが悪い。

瑠流斗は拳に力を込めてフロントガラスを殴りつけた。ガラスは割れずに蜘蛛の巣のようなヒビが入った。二度目のパンチで穴が開き、その隙間からガラスを引き剥がした。

「決して逃がしはしない、地獄の果てまでもね」

瑠流斗は運転手を掴み、ボンネットに引き出した。

急に車がバランスを崩してスピンする。

そして、そのまま後ろを走っていた車に追突された。

瑠流斗は座席の頭を掴んで衝撃に耐えた。だが、座席を掴んでいた手に痛みが走った。

黒い血が噴き出す。

闇色の刃物を握った雄蔵が瑠流斗に襲い掛かる。

「死ね！」

すぐに瑠流斗は躰を捻ってボンネットの上を転がった。

しかし、闇色の刃物が刺すのは瑠流斗ではない。その影だ。

躰は躲したが、影までは避け切れなかった。

瑠流斗の肩が血を噴く。

塞がることのない傷を左肩と右手に受けた。

雨と混ざった血がボンネットから垂れる。

瑠流斗の眼が霞む。

「雨さえ降っていなければ……」

苦虫を噛み潰したような表情で瑠流斗は漏らした。

雄蔵が瑠流斗の影に襲い掛かる。

上手く躲そうとするが、影は思い通りに動かない。瑠流斗の躰から次々と血が噴き出す。徐々に瑠流斗は追い込まれていた。

視界だけでなく、意識までも霞みはじめた。

サイレンの光が近づいてくる。パトカーの音がする。

雄蔵は瑠流斗を置いて再び逃げようしていた。

「……逃がすか」

眼を細めながら瑠流斗は呪弾を撃った。

土砂降りの雨の中を叫び声が駆け巡った。

女が叫び、男が呻き、子供が泣き、老人が下卑た嗤い声を発する。

呪弾はアスファルトの地面に当たった。

「ギヤアアアアアツ！！」

人間とは思えぬ絶叫。

呪弾がヒットした場所には、雄蔵のシルエットはなかった。

しかし、怨霊は雄蔵を犯した。

地面でのたうち回る雄蔵のシルエット。

「グギャツ……ガアア……なぜだ……ググ……なぜ……？」

影しか見えなくても、雄蔵が苦しんでいる様子はありありとわかる。

瑠流斗は血を滴らせながら、冷酷な瞳で雄蔵を見つめた。

「貴様はしょせん影だった。目に見えない隠された本物を撃つたまでだ」

瑠流斗が提唱していた疑問。



生まれたときから影なのか？

その問いは雄蔵、あるいは源三郎に対してのものではなかった。彼らの一族がこの世に存在した瞬間から、影なのか否かを問うたものだった。

雄蔵も、おそらく源三郎も知らなかった事実。影はやはり投影だったのだ。つまり、肉体は別にあつたのである。

影と常に行動を共にしていた真の本体。それは眼に見えず、雄蔵の傍らにいた。瑠流斗はそれを撃つたのだ。

影はやはり、それ単独では存在できなかった。

「……私は……私はいつたい……何者だったん……だ……」

それを最後に地面の黒い染みは動かなくなった。

遠くだったサイレンが、すぐ近くまで迫っていた。帝都警察が来る。

瑠流斗は闇に溶けるように姿を消した。

翌日の朝、瑠流斗は何事もなかったように朝食の準備をしていた。

負わされた傷はすべて完治している。戦いの痕はなにひとつ残っていない。

料理をしながら瑠流斗はコーヒーを口に運んだ。

「なぜか今日のコーヒーは美味しい……」

そして、静かでもとても穏やかな朝だった。こんな朝は久しぶりかもしれない。

テレビの音が聴こえてきた。

どうやらタンクローリー炎上のニュースと、カーチェイスのニュースがセットになっていているらしい。容疑者はシルバーの乗用車を運転していた男。可哀想に完全な誤認逮捕だ。

続けて影山物産が画期的な商品を開発したというニュース。海外に出張中の会長からコメントが届いているらしい。

雄蔵がいなくなつた今でも、偽者が会社の顔となつていて、けれど今、偽雄蔵を影から操っているのは雄蔵本人ではなく、現役復帰した源三郎らしい。

食事をテーブルに並べ、瑠流斗は席に着いて不思議な顔をした。

「なんで今日はこんなにも静かなんだろう」

瑠流斗はすっかり忘れていた。

その頃、某所の貸し倉庫の中で、アリスは泣きそうな顔をして主人の帰りを持っていった。

「瑠流斗さまあゝ……ぐすん」

主人が迎えに来るのはいつのことだろうか……？